湖月抄

をとめ

乙女　細　巻名以詞并哥号之入節の事あるゆゑに号として
みえたりと云々　河同抄　詞にはむかしおぼえてをとめ
の姿をおもひ出てなどありて　哥は乙女子も神さびぬらし天つ袖
ふるき世の友よはひへぬれば　とよめり　孟　をとめの入節・舞姫
に比していへりと云々　細　源氏卅二の四月より卅四の十月まで凡
事みえたり　花日　孟　源卅二歳の三月より云々

年かはりて宮の御はてもすぎぬれば　細　藤壺の諒闇并四
月まで之　三月の衣がへ　孟　去年の三
月藤壺の女院かくれ給ふ
ことしの三月周闋となる
也　花日
世の中色あらたまり
河　除服のさま　花　天下諒
闇の服をあらたむる
則又四月更衣の比なれば
なり　孟日
大かたの空のけしき
細　四月天気和又清きといへり　弄　諒闇の後世の中
の人の心もこころよきさ
まなり
前斎院　細　槿の斎院之今
斎院はかはり給ひて
弄　祭の比斎院をおもひ出て
おぼしめしよそへてつれ
づれとながめ給ふ
若き人々は　細　斎院の
女房の事也　御禊

年かはりて宮の御はてもすぎぬれば世の
中色あらたまりてころもがへの程など
もいまめかしきをまして祭のころは
おほかたのそらのけしき心ちよげなるに
前斎院はつれづれとながめ給ふを
まへなるかつらの下風なつかしきにつけても若
き人々は思ひ出ることどもあるに大殿よ
りみそぎの日はいかにのどやかにおぼさるらん
ととぶらひきこえさせ給へりけふは
かけきやは川瀬の波もたちかへり君がみそ
ぎのふぢのやつれをとむらさきのかみ
たてぶみすくよかにて藤の花につけ給へり

更衣也　賀茂祭之　古ホトリ　斎院の女房達之　細　賀茂御禊の日也祭三日前之　花日　文句之　孟　けふはと云句とかへりて見るべし　源氏　藤よそふわか　細　藤衣の縁也

2

みやびを好みける孟 家には葵桂とかけて用ゐ揚るれいと
かけさやハ　細すひたまへるとそ玄弟にハ数珠なりしをうけて見りかけひかけと紛る侍り
とく君がみそぎとハ除服の日の禊のことなり。らうり数珠なりおき世給て除服のみそ
ぎし給ひんと八思ひけらしと公事を倒にし世てりつこの物語あまた所にのせりて見えてこそ

あそへるうちの禊の此事よせひがせたまへりしく
おふ年の系まくハ此禊にあひあひしが今年ハ喪のやつれをかへしてみそきこそし
あり侍の衣なれど　細何事もそこの御事に盛ある事也　師大かたハ源氏の文なとハむつましく
なさけにふれられハ衣なる事事事にゆかしかるへきなれども物をあらし
叔衣　細除服のみそぎく
何日のしるく物かなしく
おもそれ川御ふもからぬ
我宿もとせよりかりよの
みそぎありけりのかたより
師 槿の父みよもしれまいへ
しれのこり乃のことよ思
ひはらや参るく除服の
みそきもとかよりめし
もとい歌かとこ何大やう
はなそし
うらみくと細 歎の事
こよくうらまさしこと何にか
らうさはされた公何かく
妻を思ひく 女五 孟同
しく　細 父宮の御
ゆかしく女

のあはれなれバなくさめ
槿
君　さく衣とも一ハ明らかと思ひ給ふ
源のく
せうのせよとくらせとかるもく人ゆり物
まいおはれめとく人めあそにおりさけてるを
しの槿もどよるとさんじのりとく所をさ
槿の女房もし
まとめおりやれうとしまれかりとかくふこ
さいとけしのまへとおりしやうよ
源の文好色めきさすとりかかはらきとも
宣旨なとの事
とあけれふへるぶとものあいハしくそとこう

服とおなしまへてはた吉服を調して　源もりまいらせ給へ孟　斎院は除服に宣旨の事へ思入
さらするをよきは世すかて　細 院ハ斎院之儀とかやけめかしきさえ抄 源の御こんしへ斎院
院ハ大名も　細 院ハ斎院之儀と
ハむかしく此斎とく
斎院を　細 斎院よまして
し御もおうのすハ常此
すうらればくとせ又しのゆ
調し
いう八ゆてもまつりしさへ
うちん　源よりかの所もさきよ
せかりのれのそうれ地と女
源の又ちへるしく世かとそ
てもがりかりをかしひるる
御方は伝うれハ何しもとはま
かぎらつて又しかり
とてすり
あまた人て　抄 源の御へりかし
くれらそうとうにこにぞの
おろくまてろひらごのまる
くと道又とりきこと後すも
くうそえこをふしく小経
こまのくふも　細 女五宮斎院
よ源對面の時ハかく哉例
まさにまつく　義 女五宮斎院

久しきあさし此をこのりや歩ぶ夜の
今さのことふんく
はなるひるかしハなうへするとこて
師古宮そそかせくしらけねばとを
とるやうなれハいつくいとうこと
わるべうあんとも上りそそふく
草子詞
れとあとありりすまりかり
源をもとさとく
女五宮の御
いいと衰よ世きの所によるのちら
くかしてあひ気をとうら
そまりかなかそてらへ
よかひいそもへれと得めさうとく給
人ハ又らひとくあるとこみ

のゆゑとくそて源氏のゆすを
まそつく
このみちしのくわんするよ
師 女五宮槿へ教訓の御く
るまうしと御しそ白とき
つもしろえしんハ源の恩
よのまふとなみゆしそう槿
のかそえられてうそてき
まづきざるぞ槿の父桃式
アマで源よ遠せトさき
年ふと無しまく 細
今だらしめくうり 式アマ口
宮の京気も欲底みそく
おしまんとハおぼえども
思給ハさらしく
敬言やまもあらこしん心給そ
細 源をまそ人よ又なしさ
分をハ口おしきるよ心給
しゐり 師 式アマも槿ぐく
欲池よちりきひて源とむ
まそ元人かの御ききとも式
アんのしあひで此下
うりやさく槿の御日くなり
しきどのまひで後悔あり

きすのみかりハこのゆかりのくわんじやうよろこ
みそあらんハ。故宮もすぢことになりて。え（桃園式部卿之）
まうそまつり給はぬなげきをし給ひてハ思（源を）
ひたちしことをあながちにもてはなれ給（斎院のつれなく思ひさだめしと）（舞よとのきく）
ひしことなどのたまひいでつゝくやしげにこそ見え
しをり〳〵ありしか。されど故大殿の（致仕大臣之）
姫ぎみものせられしかぎりハ三宮の思（細 葵上之）（御存生のうちハ之）
ひ給はんことのいとおしさに。とかくことそへて（細 葵上之 師 本）
なさずなりにしなり。今ハそのやんごとなく（葵上の御母ハ源の伯母之）
えさらぬすぢにてものせられし人さへ（葵上之）
なくなられにしかバ。げになどてかハさやう（死去せられし之）

と槿よ女五のかたりあはく
三宮の思さんことの 細 葵上の母宮之 抄 式アマ宮ハ源をむこにのぞみつれど三宮の心をかねうり
てられハことばをそへざりしとく
おほやけにもかくそへうて世をせましも 師 おなじ今ハ槿の源の本意とをりて世てまう
きりとも今ぞうハおもしろくんと思ひて女五宮詞く
けらざりて 諸さうけり
着よ立かへりてなり 細 斎
院おり給ひて又源氏の
心給まつへ給へしく
故宮にもあれしごとさ
槿の心さく前よ書し
こしをあなかちよりしく
えらすれまひしるすなどの給
ひあつくと女五宮の式アマの
心あひしすとうらりあひ
し槿の父宮にても書らうよ
我ハ心ごはしと思されし
ハ今さら其をあらためなど
なり
と何しあはうけしきたれ
ハ 抄 斎院の心づよく何う
し 恥のあいるとかまれ女
五の宮のうきいても見えのあ
るぬなり

にておはせましもあしかるまじとうちおぼ
え侍るにも。さらかへりてかくねんごろにきこえ
給ふも。さるべきにもあらんとなん思ひ侍る
など。いとこだいにきこえ給ふを。心づきなし（古代）
と思して。故宮にも。しか心ごはきものに（桃園宮之）
思はれたてまつりてすぎ侍りにしを。今
さらにまた世になびき侍らんも。いとつきなき（細 女五宮の御心之）
ことになんときこえ給ひて。はづかしげなる御
けしきなれバ。しゐてもえきこえおもむけ（女五宮之）

宮人もかみしも　細 さならぬ人々も　師 源に心と
よせる事ゆゑいひけれるす
とりはいでんと槿の心をも
うしろめたく
かの御みづから八　孟 源の心は
わが心をつくしあはれを見えきこえん
ときこえんとも
うちもゆるばむほど
斎院の御心をやぶりてた
しひてあながちなるさまにはせし
と源八ゆるさせ給へ 孟 源八を
しつらひ給ひし事とは志給八
ぬ人々 斎院の御心をもそ
とも給ふ事いつまでもなく
そせて給はぬといと
おもひそめてすくつる也
右以哭重之

御元服　細 夕霧十二歳也
花鳥 河 十二元服す 相叢の
巻註ス
右大将殿　細 二条殿息也
孟 蔦雪の巻までは右大将
と見え、みをつくしの巻権中納言

宮人もかみしもみな心かけきこえたれ
ば、世の中いとうしろめたくのみおぼさるれど、かの
御みづからは、わが心をつくし、あはれを見え
きこえて、人の御けしきのうちもゆるばむ
ほどをこそまちわたり給へ、さやうに
あながちなるさまに、御心やぶりきこえんなどは、おぼさゞるべし。
大殿腹の若君の御元服のことおぼしい
そぐを、二条院にてとおぼせど、大宮の
いとゆかしげにおぼしたるもことわりに、心ぐるし
ければ、猶やがてかの殿にてせさせ奉り
給ふ。右大将をはじめきこえて、御をぢの
殿ばら、みな上達部のやむごとなき

抄 三条殿の若君の外祖父の中将也
佐どもの殿ばら　抄 右大将の外叔父太政大臣大弐の君の家司源
四位よりはじめんと
花 親王の子は元服の後やがて従四位下に叙さる。源氏の君
の子のつぎの源氏の因例よりて
らば猶は親王の子に准じ
て四位に叙しつらんと思
しつられ 花 行跡を
うし 細 一世の源氏の子に
従四位下に叙せらるゝ也。夕
霧は二世の源氏なれど大位
に叙せらる事ともあり。夕
霧は世の覚えもあるより
てさだめて四位になりぬべ
き世の人もいひつる也
師 親王の子は四位に叙せらる
例也 一世源氏の息子にて
位に叙せらる例 河 又あ
あさぎにて殿上にかへりて給を
細 殿上人は六位の袍をいたゞ
殿上に帰ると八夕霧、童
殿上にて童殿上して昇殿
せられたりしがまたそう

御おぼえことにてのみものし給へば、あるじ方にも
我も我もと、さるべき事どもは、とりどりに
つかうまつり給ふ。おほかた世ゆすりて、所せき
御いそぎのいきほひなり。四位になしてんと
おぼし、世の人もさぞあらんと思へるを、
まだいときびはなるほどを、わが心にまかせたる
世にて、しかゆくりなからんも、なかなか目
なれたる事なりとおぼしとゞめつ。
浅葱にて殿上にかへり給ふを、大宮は
あかずあさましき事とおぼしたるぞ、
ことわりにいとほしかりける。
御対面ありて、このこときこえ給ふに

三条大宮の夕霧の
元服の見えし
夕霧を
源の
抄 夕霧の事也
抄 源の心つひに夕霧の道をも
雅 日本紀
細 不意也 いやうもなく
河 還昇之
細 大宮源氏に対面し給ふ也
孟 大宮の姫君の御事を聞えさせ給ふ
抄 六位にてあるに八又夕霧の殿上する事

のかり給ひしより 孟曰 所六位の殿上するべし 花一世の源氏の子ハ其蔭位にて位下されしあるを
の襴を着して昇進すべきに冠者君わかきとて思ひすて二の宮の位の蔭ぐらし敦忠の事を
いることを叙爵せらるゝ時にも六位也 延喜儀式に六位ハ浅葱とみえたり
殿上にのぼることとあり 一云六位のみどりの袍をあさぎといふ 源細の色ハ藍と前栽とくらべ
源氏より わきえれの色にゝたりひろくあさぎこれによりて三条の上れめのとれ細
夕霧の前ハあさきにてありとやいひて恥し人ことあれて六位にて昇進せらるべきや
所蔭ハみかげと訓して そへたまへとせられし位とひふらく
とひつゝもとりしう
向かひ陽をさすくるしてなかりし
追つくともりしき義之 親抄出
設源氏としてハ今からむと
たとへのこんみえせん向風接
夕霧の位をあみならるゝ早く
ちうく追すべき人ハ追付とま
しきみるれどく 細曰義
みえ付るうごことハ夕霧
の推ミにあるがらよ学
向あとせしめてみるめり
をましくうるれどく 夕霧を
大学のたよ志し
大学寮よいれて学問せさせ
られんとのことし 礼学記玉不
琢不成器人不学不知道
細延相の子息大学の允よ

孟源の花書也
さぞ今かゝるあれがちさの志をもゆるしてまし
ひかるとおもひつゝ侍れどおのがやうに侍て大学の
たよおそしうかうむじのすいかうにしも
いま二三年をいたづらの年におもほしなして
をのづからおほやけにもつかうまつりよべき
こと行なとすゝべ 今ひとまかり侍るべき
うちハてのいへからよおひいぞ侍る世中
のありさ海をもちいなし給ひしば 細源氏

うす 良相公後賢つまの
例あり 細 延喜帝
きりしこときらうしひとりなりし
ゝちうすへひとりなりしや
それさ及いふもうの心
おきせり
くれさおやよ
細賢子も延父よ及ぶ
こくハうきこという
所源のりしこ延喜の代
まいら何もつらへなるさ
へ延うれバまして大学
みも入をして源のをとく
のあまりそハ夕霧いるま
とうりおんともらへ
きうしてつぐく 所さ学に
次第くよ学びゆきそ
ハいうしあるんともく 所へそ
きゆらんとハ初位の位へ
よくまかりゆくへ

よまふひてまかりよるんそうる 孟 学をも
をとすくひ侍しりしことを侍てまかりつき
へ侍しげうもびざくもひろきしぬ
ゆゝはこ父母まらびもやとふ
かもねうしれとあがぬ所の世へ侍
そうかれきおやよりしここの時うあ
しいぞうすきうしにうん侍れどよしく
つぎくつまりつくへてうりゆんやくた
ゆくさきひとうしろめたきまうりうん思
ふまへそ侍らいうさきのをしく
つかさうあかもかよるひ 世中の
よとがうまひぬれバうくりんよせよ男

時によりて世の人のこゝろ
にハそれ〳〵のかはりめありて
堯舜のころハめでたくおさまる
世も孟子のころハおとろへて
孟子のころハいよ〳〵[illegible]
河めらるゝ之駒 史記
乾エにハ[illegible]
まで下にハそれ[illegible]
どのつゝしみを[illegible]して
師父の威勢ある[illegible]八全
教をひめ[illegible]人[illegible]
く先人のやう[illegible]
りし人の[illegible]
とめてこゝろへし
[illegible]
時代より武権威あり
教[illegible]時節

とくに めんくハいして[illegible]思ひ
[illegible]
まつりごと[illegible]よこそ
[illegible]世の人[illegible]
[illegible]
ほどへ[illegible]のづ[illegible]人と[illegible]して[illegible]
[illegible]
[illegible]世[illegible]よりハ今よりうめ
あれ[illegible]是ハ漢戈なるべし
[illegible]
ぬの世[illegible]
らめ[illegible]

やましくまつりて
和[illegible]
[illegible]
六位よりてハ不足なるやうなれども
[illegible]の世[illegible]
賢才の臣[illegible]政道輔佐の
[illegible]
細 源の[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]のこゝろ[illegible]
[illegible]
世冠者君[illegible]に人
[illegible]
[illegible]の[illegible]
人[illegible]早下乃
詞[illegible]孟 源の存命の[illegible]
[illegible]人の[illegible]
[illegible]
[illegible]源の
[illegible]

和戈[illegible]世 孟[illegible]の文を[illegible]
[illegible]叙爵[illegible]
[illegible]
[illegible]の世乃[illegible]
[illegible]
[illegible]今ハ[illegible]
[illegible]源の嫡男を[illegible]
[illegible]学の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

このひとのほどよ 夕霧乃年わかきは源の内心をしらねばかくのたまふ也

あざなつくる 河 礼記云已冠而字之成人之道也 疏 細 字ハ儒者ニ名をつけて八もあざなとあり 文章院にて堂監とて文章生をつかさどる 文徳康秀を古今の序に文琳といへるもあざなゝり

より 花 学生の入学乃時文章院の堂監が云々 名簿ニ字をかきて奉る 廟に字八音三字書三言行わかるゝ八三耀と以て夕霧の字も見えず 卯 日本の字ハ漢家ニ用ゆるやう八異なりとぞ

中々おくしぬべし 歴々つどひ給へ八博士ども恥をかゝんとおくすべし

はばかるところなく 細 源の御詞也 例あらんにまかせてなだむる事なく法式のごとくにきびしく行へと也

しひてつれなく 細 つよく心を念じてさびしき事をかくす

家よりほかに 細 家より外にもとめたる也 儒者ハ貧窮なれば借りたる装束也 孟 儒者ハ貧窮なるゆゑ也 河古 幣の袍の肩乃破裂し 抄 なき字之 卯 国ニしくあり

くちおしくなん、大将左衛門督の子どもなどを 細 大将ハ別腹の兄君也

我よりは下らうとおもひおとしたりしだに、

みなをのをの加階(げ)しのぼりつゝ、およすげあへる

に、あさぎをいとからしとおもはれたるに 夕霧の六位なるを無念に思召となり

心ぐるしう侍るなりときこえ給へば、うち 細 源之

わらひ給ひて、いとおよすげても恨み侍る 源御心中にはかやうにあらんこともおぼしめしたると也

なりな。いとはかなしや。この人のほどよとて 細 夕霧のほどを云ふ

いとうつくしとおぼしたり。学問(がくもん)などして

すこしものゝ心得侍らば、その恨はおのづから 合点ゆきなば恨ハとくべし

とけ侍りなんときこえ給ふ。字つくることは 夕霧の字也

ひんがしの院にてし給ふ。ひんがしのたいを 東二条の院の東院之

しつらはれたり。上達部殿上人めづらしく 抄 めづらしき作法とゆへ也

いぶかしがりて、我も我もとつどひまゐり給

へれば、博士どもも中々おくしぬべし。はゞか 孟 臆

るところなく、例あらんにまかせて、なだむるこ 源御詞

となく、きびしうおこなへと仰せ給へば、しひ

てつれなくおもひなして、家よりほかにもとめたる 儒者八貧窮なれば 人よりかりて装束のうちあはぬさま也

さうぞくどものうちあはずかたくなしきすがた

などをもはぢなく、おもゝち、こはづかひ

むべむべしくもてなしつゝ、座(ざ)につきならびた

る作法よりはじめ、見もしらぬさまどもなり。

わかき君だちはえたへずほゝゑまれぬ。

さるは物わらひなどすまじくすぐしつゝしづ

于殷於てまありけらて南もし
くして　細　幸宮かる人とまく孟子ありて八先さるゝ人とてられ事くさへさるゝ人ある拘
うらひどもれへなり　すぐろ根をとくえらりくそうて、へりどなうとも
殆へきらる　細　孤とき　うらせあうれどくすぐうとひらけりまめ
あく　義為　孤ありて正　くらひそて忘ある或ハ々あどの痛みれく
やくなどらハ近代のる之
そし節義の附ハ稱子
まてとうへ
きらくしらうらてらやてそ　うくうけとり給くうとおさまりうとるめ
儒通のまうらひのらも　むりてゆらくすゆかりしひりしわうゞふゞ
此席ハ只ありうれまうら　くぐさひゞうよ給りうちおくくゞうりの
ひらうらく
忘めおね　於中ねも
民中々　細　矛論なき人之徒
抄同義
れるく　細　此詞ハ会ある
うくまれと家あそくハて　ゐりしうかりあまうじてとよりとしてもや
しくくうかん之為わかあて
杯とゝら独く旅義　むれやけよハつうまりりあうふろけれたさ
ぐうあらそくゆうくて
細至るなうとて　驚るゝさ　とあり為て　ひうぬ給いよいふよんでうれるハ
流さし阿ゆらとし墾どの　てまうひゆれハ又なりもあいたりや止
こらさきし逃流之義ゆう　すんぐれたゞひくうかり席ととひとそ

あかりぬへりとあいやふもらゝ云ひぐらいかりさうゞ　師　於り八凡也かいりしハ塙下之義耽
よ大飱などるも人数の外の人乃食つりのると塙下の立達とらおかりハ飱くびくうそれ
つくうぶとハ　細ニ 非常よ絡すぐくきらいふうらりゆかりよりよう　行の儒者とゝるは中
よ大名民ア々あしの塙下よ文りりあま不飱度ハくるみりさ非常よまうるゝ事なきと
畢竟ニ分ありと色代をりうくし　師　大名民アなどの育皮の祝をおもいてありやかを
くぐうりの者うまとかりゆづしと
ハつうふゆうりまふうしさり其大名民介の育皮よ住ぜゆハもとの者るもとあれども皮
さりまうをへくもうのるうすとかりとハらるゝさ　乖りうう大学の宗よ大名民中之受と
の塙下飱よぞりつゞ常とうりまつ甲あれまぐれとるかく　細　大学の宗乃詞てなり
よんく乃品ともちろぶまして八大や打まつうつうくれゝせ給りすとふりよりなりらし
と中なり
かりうるし　細　風俗の詩凡相まりくて英給りて席を引てゆるべさとて此ぞしうる也
西風俗詩よなりかりしやかりうりし大変ちうくてなりうりし下界又政変ありけ時上卿外
記の戸よ入て結政の官掌鳴まと唱事あり西宮記ニ見えくうりうとき孟政あり時ハ氣
を退て息をもをぬやうかるよりまりひと儒者の云くなりやゆうんとハ祭やすねぬう
しまさよまうひやめとるゆかく
さうらうひかうしんとく
うらうびあんあとどぞうゝぶるゝいとお
抄　大学の道まりりねんと
うしこまうひあうちねんてどいめでうとく
抄　儒業より立身の不守し
けりわりととひこのとらしりいぞさ
うく業因を未ゆりうち期く
ちあつるよ逆中あみどハ是へりりがれよう

うちあさ海をえてこのころ　がら夕影を大学の道によい
むしろくらし源を称美
やかすり
さうかうかまししく　河のよ
いちもいちらつしてある火
のうけまなくの作法が相ま
採芳どのやうなんらまう
なり　弄猿楽ハかうても
あり　さとくやおのまゐを
しそて心よぬりひ入ぬこと
ともいらかひの初く大学
流源氏の作に随てこと
よさうがくをこまよ
こそへなまし
あかうそうしませいふされ
花　傀儡なり　細けらうす
あらく源の出處しる裏で
皆ついせうしするは伝あるべ
さてもおしうべきよそか
られ煮給く　孟書云青表
紙ハけらおらしあどもざ
あざしくくてさりつてざれ
るんとよしいべしんいつい世う
しそうじせべたれうんとくし
氷きのゐよそもくづきとあり
て影戯あらくく孟月哉
さらえん　嘘　さいぞんと
もそし

歌のりしえりて　花　輪抹（カリン）の
人が歌をろくく韻の字々
切韻（ミヅイ）とく何字をとりて
韻とすと云ふ町もおもゐ又歌
中よれ韻とらひて歌乃
又文字の中平上（ヒマヅシヤウ）去の字をを
とりて韻とさとるなりも
あり又何の韻かくと脚
君の心まうせまよわう
とまろし
左中弁　細　菅家の初の人
之文章生より昇進す
人なるべし

ちほしあそあどしつゝかりあざ海をえてし
このころいらざしかふがめでしきさうしら浪ぞ
くさうそしまへらいさうりのいなさる
せいとぞあめげかりとてをとどむじかしが
おしうのくあうりかう［illegible］しじ較よいり
てハかくいまをそうしけらえんなう［illegible］
よさうがかあしくさひしかざよ人こうろげ
あもなり
かうあどさ海くまげよいてあすべくあるんれ
さ海ことなうわざなうそうかう初しくいとあ
されうくあるう弟みくけうきうしま
どいされあんとのあひてえをものくうよう
くれてぞれぐらんじゃうかうどざうさかれ

（注）大学寮の作法を出て云
（注）細　まもけるまさ海之
（注）猿楽
（注）ちろせの制あうく
（注）大学寮のものをもとちう
（注）細　もれなりそをもとかくし
（注）河　掲焉（イチジルし）
（注）火影
（注）入目（コヽろきさうさうま）
（注）軽粧
（注）源氏　河領之
（注）孟　花庭の流殺定かれらし

よつきあまりてぐくりゆまりのつくのこへくらう
だあらをきらしめてつり殿のりさよめし
とぐめてとくよりの方ど給はゝせうら
まそてゆまりづゆちをきさいぞんとをもめして
みしふえ川らくを給ふ上達部殿上人ととさ
あべきりぶきりをいざれども紛くあゐそうら
ふかきのゐんでい四あんらのへくゆくゑを
そじめてそまろりてせくつくりてゆかのふ
けうあう歌のりじえうて文章博士なりき
じかきこうの乗あれバおけりてぞゆう
すが左中弁かつしじつうりまつうてらい
とさしけうひとのこはつひ始まるて

（注）細　源仁恕の小りさちそくらし
（注）源の之
（注）別て禄あとまで
（注）博士
（注）花　文人　細　秀才をいふ
（注）字付る
（注）詩文子まへ文人を
（注）八句詩之
（注）上達部殿上人之
（注）絶句
（注）與
（注）かきそもの
（注）細　四月
（注）の未あれども
（注）もろたり
（注）詩を作る

かうざう家にせまりて
是より詩人どもの詩に
つくれるを述て菓子に
地に云く
窓の蛍をむつび枝の雪
ならし　晋書ニ車胤字ハ
武子南平ノ人也家貧ニシテ不常ニ
得油ヲ夏月則練嚢ニ盛数
十ノ蛍火ヲ以テ照シ書ヲ云々孫子カ
世録ニ云孫康家貧シテ無シ油常ニ
映シテ雪ニ読ム書ヲ云云　河海
花 車胤孫康ハ家貧しくて
あかりをもとめぬに蛍雪を
あつめて源氏の是に業花
まなびつゞきべきによりに
てあまどろしかば学問し給
ハありがたきさまなれバ枝の雪
ハ窓の蛍に対して其
跡に柘とて九枝とする
義 河海にもそりて本説に
木の枝にあまる実の雪
なれバ
[illegible]
みせさきゝく
孟 日本にハ

神さびてよめくこあげさる程どいとゆりしにも
ゆかしくことなる博士なりさるらう
さ家にむかれきて世界の業花にのこる
まふれまふへきいけ身をすゝむてまいじの蛍を
むつびえぐの雪とあるしゆまふものさしの
をぐれらさ海をどちに川のことによきらん
みどんへくなとまつらひあつめいきかくざと
に面ろろくはろらしいもちてまうりうつる
へまほしげろうよの文どもおきんその
ころ世にめずゆきりけゆきでの道そさう
なうおやめざ義なろうことさへもとくれてあるを潤
みうしてもぎさはぎしうぐじ女のえまりぬ

せくの道ハさしもあり
さるヨハ不及事しなり
女のえとしらぬこと　細 東脩の礼也
みかうく　孟
論語述而ニも自行束脩
以上ヲ吾未嘗無誨焉
花るゝハ令の文とのせたる
花令日凡学生在学各以
長幼為序初入学皆行
東脩之礼於其師各布
一端 延喜式云凡遊学之
徒情ニ願入学ヲ不限年ノ多少
必懃加講試其有通一経
聴預学生但諸王及諸五
位以上子孫ハ不須簡試ニ
孟 入学也 論語云東脩の礼
とも心ハ一束ノ脩脯をもて
源中の子のはあへらんと云心
河 二世源氏歴儒例　儒 源ノ
伊行 源三氏ア大輔兼明
親王男花山院侍従同俊
賢 正二大納言民アマ　俊賢卿ノ
右大臣融男
例を叶へ令ナ例故

あまくの詩ざにて白毎にゆりしくとふとひ枝源の待ハいふてり
菓子の地に云くきたる事あ云ハ女房の身に似あはぬと卑下之
まのおハあくれゝしとたとうてそれなれバめでし
川ぢらつづさゝおとじくとうふてしもをさせあそ
やがくこの流乃内にめでぎしつてすてかめ
やうにざえやうさき師にあげけるそしてあ
ぞ学問をさせなりぞ給ろう大成の流わたり
もゆるくまいうて給ひてもしる内ら
そてうとちどのやらにのこりそそすらそ
えまへれぞうしこみゝくハえもめつうひ路ハ
じしそあけりまり所にこめなりうつる也
ならっ月によろこびそうりをまうりまへにとぞゆう

この院のうちにゆづらしつくりて　孟 二条院の東院に局を作て師を付て学問をさせ給ふ也

まうちの何とて　大宮ハ夕霧をいとをしく思ふて御さとの内にて学問をさせ給ふ也

二三度大宮の方へハ学問の事にて

ものまつくしもおりて

初学記曰父母養其子而不教是不愛其子也雖教而不厳是亦不愛其子也父母教而不学是子不愛其身也雖学而不勤是亦不愛其身也是故養子必教教則必厳厳則必勤勤則必成学則庸人之子為公卿不学則公卿之子為庶人

今ハ寮試うけさせん　細 大学寮にての試を大学寮試といふ 史記を読しめて雖博士を試事也

学寮にて学生をこゝろむる 寮試にハ史記 大学寮にて文章生に補を擬進

学問に苦しからでも

しきそしもひもり いふせ

きまゝに殿をつらくもおはしますかなと　夕霧の心に源をうらみてかく苦しき学問をさせ給ふと

かくくるしからでも高き位にのぼり世に

もちゐらるゝ人ハなくやハあると思ひ聞え

給へどおほかたの人がらまめやかにあだめき

たる所なくおはすれば いとよく念じて　細 夕霧之

いかでさるべき書どもとくよみはてゝ　実々しき人之

まじらひもし世にも出たらんと思ひて たゞ四五月

のうちに史記などいふ書よみはて給ひてけり　史記百三十巻 司馬遷撰也　夕霧十二才

今ハ寮試うけさせんとて まづわが御前にて　源氏の夕霧をして　寮試

細 源の伯父にて内々試給ふ也

試みさせ給ふ れいの大将 左大弁 式部大輔 左中　夕霧の伯父也

弁などばかりして 御

師の大内記をめして 史記のかたきまき　夕霧の師也

まきれうしけんうけんにはかせのかへさふべき

ふしぶしをひき出てひとわたりよませ奉り給ふ

にいたらぬ句もなくかたがたにかよはしよ

み給へるさまつましるしのこらずあさまし

きまでありがたければさるべきにこそおはしけれと　夕霧の伯父

たれもたれも涙おとし給ふ 大将ハまして　左大臣のみまかりし故をおもふ

故おとゞおはせましかばと聞え出てなき給ふ　源氏也

殿もえ心づよくもてなし給はず 人の

うへにてかたくなゝりと見侍しをこの

……とよみて系の中に二系に通ずると及第とて下略

例なる人を委し

左大弁　細 以下三人系図に委し

みそかなし　師ある儒家

にかへて仕る官也

孟 史記の内難義なる所を試てみせよとなり

へきふし

夕霧の史記の文段に流通

義理をつまびらかにしる

つまびらかし　細 仮名にあれ

まことしからぬ

義不審の所に爪しるしをつけて

さるべきにこそ

夕霧　細 此人ハ大学寮に

人のうへにて 源の詞也

うへてうへくろうしくすぐ
りしくもしがうう身めしたに
ろりうるとく
観の文らうりまられゆく
細 これ擬の字こ帰本走
にまうきり花子の歌人
もうに移てみやの重々の
あうられゆくといふよれ由
くハされゆくんうやみや
のきよぞうりりてゆくん
く源の人の文ハそてみし
が紀身もいろの落くそて
ハ夕霧とをとうべしとの
まふおねみどのらくまふ
経はう紀てみてのまる句之
うきさみの文きろいうあさと
ときおハんのちをきこゆやにさ
よい太子のこと。今ハ源の
紀身はひきうけての経之
世のたかりの　細 世ア夕ヘハうら
もむらそをみぐしきん
うえのかどしりハりらみ
まきそ　おか方学みありて　諸曲
ゆりんじうらう不

ゆきあふうつよはやのさらうくちうちられゆくこ
とハらぐぞくすらしね数よりしうう世よこ
その経きれるなどのすそ。そしのどハ経とぞう。
此所のうちうち事つくめひがくありとぞん
つまかねさかづきさしのべハゞくろうつれて
とうう目つきいとやをとく世。世のひかりのすて。
ざえの経よりハあらわられどもすげなうて
身まいきくあんまろうとはらんじうう酔わ
まらくうくどうりまさめしうせさうれうう。
身よわきうかまくれうりとそと経うりてし此
さえのいうくま。ふらかまらうま身んせうへさうと
ゆりんぞうまして。ゆくさ紀ハあのらめぐさん

此ろえのけらくよ
れくりんは　細 大学寮
の門之　師 拾芥云大学寮
一町 二条南 三条坊門北
壬生西 坊城東 又云神泉
苑西云々
ざようろおしらひ　孟子
常まて 博儒者の中ハ
不似合とし
序の事を　細 学生ハ以長
幼為序と見る今の文也
花寮試の時ハ長幼どりそ
序をすして人の経姓え
いうとも歌君の恵も
学生たの末学に列し経
なり

夕霧け師うの身のゆさうよ如くうらとらかり　源の下巻くのしけ源入しくて師よ元服ありし
此ぞ紀 如何次えるんと学え化よきし　此ゆがしぞあんりし。大学よまうり経曰を　細 寮試の南門也
れくりんよ上達部のれらう肉ども。ぞもぞら
ぞつらひくらかりう。世よのうらうらしわ
ゞしらしうろよ。又みすくりてうしう。
つろうれいう経へる。らとぞの先れ此さ院。　細 夕霧之
げまうくらまじらひみはいてどもあそう　安付る日のミこと者也
うれくしげあり。例のあやしきさ物どと乃
すうまぞうつてきねさうろ。庭のすゑをとゞう
しくゆかをぞぞいとこうりうらやらうて　弟子深く
てもゆるさゆうしのきうろれどもありてめぐ　細 制止を加へし
まうされど。もとくしをあくるとまえてそ　夕のうての作法にも礙をなし

大学とよろしゆう　細 菅氏よ
ハ勧学院とて上にあり源氏
よハ奨学院藤氏よハ学
館院をたてゝ何も其
も学文をさせ給ふべき
ためとなり　お 只今源乃
御息所をして八夕霧の入学也
一しかさんてまれなること
んぎん人かわりとて
文人ぎぢう　河 文人ハ文章
生ぎさうハ擬文章生とぞ
文章生よ擬せらるゝ 或擬
進士云々　細 進士及第の
花鳥よ書なるまを人ぬと
あげてハ八ぞ二ッあり。方略
の宣旨よりうけつる人ハ
の文章生なり。進士ヵと
て或いハ進士ぞ擬
文章生とハいふ也文人ぞ
ありといひとてあり文章
ハ擬文章也此ハ後行章の
時御前の試ありしなり
師行花鳥雑秘ヶ勘へし

給ふ。つむりし給ひて大学のさうゆうかうな
まはかくなりぬるの人々は、られをもとくとはそ
よろづしあれけれバいつよく世中にまじえ
ありぞうくあらきん給ひくるんありけり。
ぶんにんぎさう（文人擬生）といふかうことどもよ
りうちはじめ、すがすがしうはてたま（早速まで）へ
れば、ひたふるにこゝろをいれて、師も弟子も
いとゞつとめまさり給ふ。殿（源氏の宮）にも文（ふみ）つくりし
げく、博士（はかせ）才人（さいにん）どもところえてなまご
とにつけても道々の人のざえのほどあらはるゝ
世になんありける。かくて后（細 立后のこと）ゐ給ふべきを、
斎宮の女御（冷泉代の國母薄雲之）をこそは、母宮もうしろみと

上よ通ろを擬文章生よ補せらるゝし　花 方略ハ秀才進士二ッあ
うつくしめ　一條宮を源氏よるゝよし　お 是ハ学問の事よりゝ源の補佐（ホサ）の后よそ
なべてなよびよつけても再與わろきとえく
何もとえ　細 薄雲也　お 秋好まのうちをわらうちに孟秋好を斎宮のさごめ
すふと源の言付まかて
源氏のまりきり　細 河海
花鳥に書みえたり　花 表奏
の中宮の後斎宮女御の中
宮よ立ち給ふ源氏のうち
つゞきてうちしきりしも
き帝王親王の御女とば
みな源氏かよし云ふハ藤
原氏の后乃中後をそる也
河 後朱雀院御時陽明門
院（三条院ノ皇女）中宮嫄子（敦康ノ親王女）
両后共依為源氏春日大
明神有御祈太神宮有
御託宣事此事頗為寛
弘以後事卿可閏色乎
桓武以後天下之國母多
者大織冠御末也忠仁公ヨリ
以来藤氏皆外家而必執政

ゆづりきこえ給ひしかばと、おとゞもことづけ給ふ。源
氏のうちしきり后にゐ給はんこと、世の人
ゆるしきこえず。弘徽殿（こきでん）のまづ人よりさきに（后よりさきにまいり給ひしこと）
まゐり給ひにしもいかゞなど、うち／＼に
こなたかなたに心よせきこゆる人々おぼつかな
がりきこゆ。兵部卿（ひやうぶ）と聞えしは、今は式部卿（式部卿の宮南代の伯父之）にて、此
御時にはましてやむごとなき御おぼえにて（冷泉院女御入内のおぼえ兼まおぼり）
おはする。御女ほいありてまゐり給へり。同じ（式部卿の女のまゝを云へ）
ごと王女御（わうによご）にてさぶらひ給ふを

弘徽殿 細 ちゞの母くの皇女也 孟 みとづくる十二まで良人来ず
こゝろさゝのさ 抄 斉宮さる弘徽殿とさぶらひそれつりふて
五十四宮 細 醍醐天皇女 桃園式部卿重明親王の女 式部卿 醍醐ノ子 後式部卿親王の御女なれば王女御と
ならびに王女也 抄 同じく王女御といふ 秋好中宮は前坊の姫宮 是は式部卿 親王の御女なれば王女御 と申
王女御なり 河 朱雀院皇女昌子内親王 冷泉院 女御 世以稱号王女御 之 允王女御 きょう
を姓とも青ハよし付く 李部王記に若女御 源女御 など有り
母后のおりしもとゞかぬれゝそ
ます 抄 藤壺の中宮をいふ
うつりみとし式部卿の宮
まハ内々のこと
ありさまの 細 右母御息
所ハ不幸にして薨給ひし世
引入さいしい人なりしを
ゆかりの太政大臣よみがへり
細 勤例 抄 よみくより
先 忠太臣 貞信公 太政大臣 忠 仁公
義公 兼通 任太政大臣
先内大臣 但関白也 是より
後ハ連綿之信長 公 清盛
公まで内府より任相国せ
らるゝ 孟 みかづくれ是に
因太臣にくして相国也
河 皇子任太政大臣例 大友皇子 天智天皇太子
天皇十年始任太政大臣
太政内大臣にかりまいらせ
藤壺の宮にありしかと
内覧同十一月内大臣 中関白道隆 永祚元年十二月廿三日内大臣二年五月関白 帥内大臣
伊周 正暦五年八月廿四日内大臣 長徳元年三月八日内覧

れ奴りさみるくきてしくゆるすべうりて 母
后の御ちゝしかまとねいかりのらしろさみと
こともそよ川りうしうべくとゞりくよ
ゆかりしわしそひされど 細 秋好之 孟 立后之 藤壺の梅つぼねまひ
ねれきいのくひきうへをくれまいりつ
世人ゆるさゞまて 源氏 おはしまさば太政大臣よおゆ
世まで太政内大臣にかりまいらせ 世中にし
だまりこうまへくゆづりまうし 源の 給へり 細 けいさい
下太政の事をさり
らしくもよりくらのとらしくしも
高市親王 天武天皇 御子 持統天皇四年任太政大臣
抄 右太政内大臣によかりまつるを世の政をゆづりまいらせ
河 内大臣執政例 忠義公 堀川関白兼道 天禄三年十一月廿七日
らるゝとりしてきしまに 孟 后とちそく
細 梅壺よおり
さまひそれハおかしおるさかはまげはひし
細 是之職のうしや
かとゆかやけごとよりしてるもにろく
孟 十二人おまりとてもおへ 抄 系圖に載所十人兄
よれみどもし十余人ゆるすひつりのさまよ
細 源にそとう
こゝるいかくよかりそてどとうしゝさく
こさざんさ
よられ家のちらかり女ハ安部と今一家と
弘徽殿 ふとそ
むゆゝしろゝけりひどき細りりてそておく
かりすらそとうのうされど その母ぞ梅
誰ともなし
家のた大納言の北方よゆるさらしむりひしろ
南家の本の子ともなし
わんとゆり 細 雲井居 アゼチ 今ハ按察
の母と重孫之 今ハ按察
大納言の宮をおまま
つとし

どものかずおほくなりて、それにまぜて
後の親にゆづらん、いとあいなしとて、とり
はなちて、大宮にぞあづけきこえ給へ
りける。女御にはこよなくおぼしおとし
きこえ給へれど、人がらかたちなど、いとうつくし
うぞおはしける。冠者の君、ひとつにて生ひ
出で給ひしかど、おのおの十にあまり
給ひてのちは、御方ことにて、むつまじき人な
れど、男ごはうちとくまじきものなりと、父
おとゞきこえ給ひて、けどほくなりにたる
を、をさな心ちに思ふことなきにしもあらね
ば、はかなき花紅葉につけても、ひ
ゐなあそびのついせうをも、ねんごろにまつ
はれありきて、心ざしを見えきこえ給へ
ば、いみじう思ひかはして、けざやかには今も
はぢきこえ給はず。御うしろ見どもも、何
かは、わかき御心どちなれば、年ごろ見な
らひ給へる御あはひを、にはかにもいか
がはもてはなれはしたなめきこえんと
見るに、女君こそ何心なくをさなくおはす
れど、をとこはさこそものげなきほどゝ
見きこゆれ、おほけなくいかなる御なからひ
にかありけん、よそよそになりては、これをぞ
しづ心なく思ふべき。

あくのごとくなり 細 左政大臣并内大臣の大饗也 師 大臣大饗には ところかはるべし

萩のうはかぜ 孟秋ハ礼多書ナそ云 あふうね萩の上風萩乃下露

びハうなる女の 細 びハうなる女の

つらしさゆゑかくしまつるはかなくことをも
のみゆるれてどのつらくおちくみあらわ
なとはうこの人もはのくおはりをもわり
きれしなまりいりくしもと維みあらこえ
んとうしつくあらくし。あくの大饗じめく
とそく世中のはいもどりすくのごやうま
ならあふこうは身しらして萩のうは風
りうすらぬ文書よ大臣のはらまはの
ゆうぎまのひく姫君わうらえあひて
はしとあてむつをなりまふやいよろ川
の物乃よ手よゆもしとれでいつれと川さん

右のみと 細 うまれとま
どうえおけ候

抑の上手の後よハ 細 藤大王の御手より引
つたへうるおもわし
うらしや 師 明石入道延喜
御手よりの後ハ手ど
云々

ひろうむくせ 細 合奏を
せそ云々 師 明石の山が
川そて総引て此所よ
もくれまうずる物と
のまよく

あれどらくしきさ物よ侍れ。今の世にま
こしうつへうろ人ゆきうく侍しとなり
まふり候乃こころ。これの源氏ます
まひく。女のなりゆれはゆかしき山里
よこめきつる人のかそにも。じよ手と
ましりのこしよ手の後ゆは侍れど。まよ
て山が川ゆくよしへうろ人いそさしも
きもくれりん。かのゆかしいしくらしま
といくの絃せりく侍れことまおりは
あそびのうこれざえハ秋ひろう
きうれまうまり侍らしそうし
すごくゆて。じ手をあうれへてる

細九ハ手

おもひすてゝ
ふるくよりむすひと云り
箏柱也比巴ハ柱と云箏
ハ八柱と云字也

さいはひおもへて
細大君の御ゆゑよのさい
その人あるとおり
めでたかりけるへかりや
かくれ上の御心もたしかれん
むすめもくされたる
とのちかく

しきことされあそびのあひて文はそくの
しやう給つてむらうきすこしもぬく
なりまかりやとのきこえど地をしきあうひ
きまふさいもいりしちそへて我あやこう
めそしうりけるへかんや。地ひの世てよりき
まくらね女でとおもひけるをすりて
そへてもやはしのかこしんやへいらうさに
ゆつもなくはかなくうせはてゝ人ものへ
人なりもぞせ給ふなるに川の御給ひて
のふ。女ハあでちかでくせよりつて。世よを
らかしうてもの給かれなるど。人のよろ
給かく。女かどけうハかしくぞ。今のは

細 朱雀院
春宮の御元服
の時は今上とかせ
しまり。立川府の御かた
春へ雲のをとしのあれ
ハ御め姫君のきさき
まことに給へとく
うらふさいたる人の
の后ある 細 御中宮を
より立 うらいふと云天
宮と兼よ揃く御かた
しうを廣きあるべし 細
のまく御姫のことく
さきぬしくハ宮に淨身
物給むこるくと云べし
地ひそびひぬれ 抄 後人
迎ていくとかすかの
立御かた姫君のうし給ふ
宗家のこあひなる御く
とかゝしも 細 大臣の御之

もとはとりてハ地ひおもりしくおひまひ
しかど。おとなる人まじらひかねぬるくとに
かん。世ハおもひのほかなる物とおぼひ給ひぬれ
おぼさゞりけるいりてのちよかるなる
ん。春宮のは元服して今のうへにかかり
めりとも人ちれぞおもひまへらず
と。うちふさいたる人のうへとれ。后がね
こそまろ一地ひをかりぬれ。立出給へら
ん。おし。こもりたる人あなづりかくやと
らん。なげきすんべるをうしきこえあるん
この家よさらすぢの人はそのものに給く
で。やむごとなき。故地下のこひ給

忠仁公以来藤氏にさ
かへたる事なれは今かく思
ふらしにて思ひて多く
しこころもなり
くりそへひとかしこしと
大臣の北の方は源の姫君
の方よりかきつゝ中の
方はあへしとする
以前之も　細 源よりかれ也
て発 大臣と源氏と又花
あさしいかへ給る弘徽殿
の女御の后よりかくすみつ
よまさしは根本の事也

て、女はるのあはれしくとも、ふるき人のいひおきて給し
地をもをしかはりくりくひかしくく
ともりしましと、はかく、こゝてぞとも
こゝゆゝとうしめしけにおもひしまつる
姫君のはなちのゝしくつゝつうらくとそ
さうのはしとむさまゝ然はかしのさうり
ぐりんかしこきのあてよりまさめりしき紙
くし海りまへいちらしひてまちてとぞ
めでたさまさりぬめつゝ心さまかげ
ゆてしかゆれてつきいそしう心ちかくる
ものかちすかと見えを限ありと
ゆかしくりしくに　をさへ

あきのよのさくへの　細 秋よ
めつらしきよりあはれ潤之
風のちりしをさうしちくる
しと　河 文選四十六 大臣注
陸士衡カ豪士ノ賦ノ序ニ落葉
俟ア微飈ヲ以テ隕ツ而風
之力蓋シ寡シ孟嘗カ遭ヒ雍門ニ
而泣ク琴之感以未タ何者ソ欲スル
隕ル葉ニ無所假ラ烈風ヲ將ニ墮ント
之泣ニ不足繁ク哀響ヲ也云云
李善註ニ桓子カ新論ニ雍門周
カ琴ノ事ヲ引ケリ　細 豪士ノ
賦序の如く私案之豪士
賦ハ齊ノ王周といふ人功に
ほこりてをごりしをそしる
賦也。文選四十六ニハ

あひてたしやるとまれ　内大臣へ 和琴ひくめ
しせまひくつろちのおんくへのおもくいま
めてたかせさらまゆのきこえてういひき
まゐりしゆきしろしゆもへの精限あく
とのつねみかひゝてらかこゝう
このたびはてれかしろはうちつゝら
風のちりしそしそくなすかしと打ならし
てうんのまうしねともあやまりて御ふえ
夕ぐれにわたさんやうして林風のやうなき
会くさうが志絡つる都ゝのしらべれ
じうれさ海く世となしとしいとりと
なひきうくし給ふいとうさんともあり

皇を戴くより武序に不甚般衰弱者也とのべる時ハ是故若時殺於天理盡於氏庸夫

可以濟聖賢之功時能可以定烈士之業言遇時也故曰才不半古而功已倍之蓋謂之

茂時勢云々此心を庸まゝくやしき君を賢聖の名ありて斗牛の月のもらしきたるを

[illegible]

みえぬのみ [illegible]

きどうくこの御学問

[illegible]

[illegible]

孟 催馬楽 更衣 萩が花すりのことをうたひ給ふ
河海 衣がへの哥をうたひ給ふ 今案
大殿も 細 親る古大殿と云々 源氏のことなるへし 孟 源氏の事也

いとほしきこと 細 夕霧の
姫君をひきはなち給ふ事
なり
ねび人 孟 大宮の人々をいふ
まうけもなくて此夕霧
雲ゐのあひだの事也

きなき世に心のゆくわざをしてこそ。過し
侍なまほしけれなどの給ひてかはらけ
まいり給ふにくらうなれハ御となぶらまいり
御ゆづけくだ物などたれも〳〵きこし
めす。ひめ君ハあなたにわたし奉り給ひつしひて（孟 雲井の雁）
けどほくもてなし給ひて御琴の音ばかり（夕霧と雲ゐをとほざくる也）
をもきかせ奉らじと今はこよなく
くへだてきこえ給ふをいとほしきことあり（孟 そ）（今のさまの御心）
ぬべき世なるこそとちかうつかうまつる。
大宮の御かたのねび人どもさゝめきけり。（細 内大臣也）
大臣出給ひぬるやうにてしのびて人にもの（細 内大臣の女房なるべし）
し給ふとてたち給へりけるをやをらかいほそりて（身をほそく）
いで給ふみちにかゝるさゝめきごとをするに。（女房達のさゝめく）
あやしうなり給ひて御みゝとゞめ給へばわ（内府のことよ）
が御うへをぞいふ。かしこがり給へど人の（内府の身上也）
おやよ。おのづからおれたることこそいでく（愚か也）
べかめれ。子をしるといふハそらごとなめり
などぞつきしろふ。あさましくもあるかな。さ（細 内大臣の心）（孟 夕霧と雲井の事）
ればよ。思ひよらぬことにはあらねど。いはけ
なき程にうちたゆみて。世ハうき物に
もありけるかなとけしきをつぶ〳〵と心え給（細 内・宿世 孟 只今独すさむ）（おほやうに合点しる心）
へど音もせで出給ひぬ。前駆のこゑ（内府の車の）

ことゝもへと 大臣の
女房達内府のことをつぶやく
と云也 内府のことを
まいれり さし
おれたることこそ おれ 細
おこりたるこゝろ也 おれ物
子をしるといふハ
明君ハ知臣ヲ明父ハ知子ヲ 史記
知子ヲ莫如父ニ 日本紀

今そへりめでたけれそ
花あざやかなるすがたにて
師 内府の今までいづく
にゆかりしぞ今もねたく
こそ思ひやらるれと云々

孟 弄花抄言書

まうけし
師 つまどに同し
まづつゝきゝれたると
細 内大臣のはれんとて
思ひ 師 とりしむかり
くだりまうまでふかうし

ゆかりのまちねく 細 秋好
弘徽殿のなき后姫君とハ
太后方人ゝとして云ハ

さくらうは 夕霧
まも雲井の雁よりや
としひまひとくし
夜の世中 孟 内府と源
世の中かくあれども盛
衰ありとひハありなき

ちえも 細 ちえどうし
めくしさまし 師 内府
云々

けさう 細 まづうつく
さけきゝて想しすそ
思ひしきこし 抄 御
てゐぐろうのありねく
二日ごろありて 孟 二日
御ごおもしさを見て此く
のちえへまうのかへし

めでたき物ハ今こそいでさせたまひけれ。（ちえの女房達の詞也）
いつまでの春にかりしましつらん今さえ（りくれし）
かうおぼつけてとひおくれ。いときめでさ（内府詞ぞうこ）
（きこえくるし）ごとの人でハそうちうるこ香のくやら（男子あそて）
そとよめさおつかいろまさの気乃おりし海（夕霧のうさ）
しつかとそさひつれなるいくいけや。
あかうこしやはのさこしめしつらんまう（内府の心）
ずつしきれんそし侘ありて。殿ハこら（内府の心）
そぞうりはのきかいつかおしくわうさ（夕霧来て対面なれハ中にそハきそとく）
こよハあるね。めくらしけうあるゐ（御おまり近さゆかうとく）
ひとゝ世の人をさひつかべきこと。ゆゝ乃（源氏也）
しおそふれどとしさつかまほしとつき（孟 内府女房達）
よ。まくらうは人よまきかくうのやことて
さひつきゐへくとわかるさくゆ顔さ。殿の
世中の人かさまは昔も今をゆきよく如ハ
しるたうゝやうの方ふかくハいしことゆかし
すひし名残を思しおくらうけまば。
（お内府の心よりかく）御覧がらうそありし給ふ。心色さかさりおん（夕霧思ぬの中）
気色ハゆらんとうん物ぎ世よなくうれし（夕霧内八し）
うちふれむまごかく。まりきそ給なく
（白えめさしるまと）ん。人このうびし気色と。めぞ海しう
（河 雅稜）ねうしと此かすまれいそうこゝそてきうて
（お内府のうとくしくわきやらうきうて）あくしうあやまりつれらうよハさ
つめかくし。二日ごろありて参りまかけ。

ちきりにふかりあか
細 細くよまりすか時
はる大臣もちこえまで

まうぬりの 細 姉君
あはれ大臣ももそむくへき
しうの出来ぬりまへ 孟 雲
井雁のいかにはれこゝろ
くん大臣のえらのしまそしわかと

ちきりは年月のゆ時は大臣もいとゝれん (孟 尼)
ゆきうきこともの聞えゆかはしくそれあま
ひさいしつくろひかりしきはこうちさ (額 細 かきの尼のこと)
まじはりそへてこゝろかしくもとむし
げよかりすりひしう侍すれはまいりかへ (内府ハ / 孟 云弁のもとへ)
そゝしもまり給ふは名しとおしくて (けうとくぬく / 内府のかきかへ下とのわかきこと)
こゝはさふしぬをえらしすゝくへいふは (細 内大臣の御こと)
をかしんとなとそれはさむ かくしき
きぬよ侍らねと世よ侍らんかきりしれめ (内府の弟上とのかたへ / 大臣の)
されとかしんきゝれゆかつゝるきこえそ (細)
るすくもとそよりひまあらぬめの
くん大臣もしめし御ゆかしさを心へき (大臣とも)

夜なよつと申 孟 内府
ん大臣の今さらひさうひ
のまよんとさそとの御
よ侍てさもとよつされ
しらすく
ゑいりしは申ゝゆかさるすく
より 内府ハ叙位からう
つりて雲井雁の幼かの時
よりうらくしりしえ
すいめよちうさ 南殿の公き
遠弘徽殿かの内のまつひ
ハうくとらうぬと見あつゑて
雲井雁ハ大臣よまゐらせな
とをさうしるり

このいてはうでさうりとゝりも思ひか
あへしくいはみあれてさせしいわ
ぐらしゆかしくかてすんし殿上のこひ給
よ大臣けらくしまつるれかのいうさなひて (大臣の)
ね見えさしゆかさるよかはりぬいかやうもあわこと (みちのさるかりなきかせ / 細 大臣の御こと)
めかくかいまさうしのおもひのまつはくさき (細 満心の事)
ていゆはうらうんしきうてし給をさんすか (細 くるしきすふかく)
よいておしかれし よのましきれけり (細 内大臣の御心也)
おさうすきいりのとをりとをさえて身つきうちお (細 姉君と御あはゆかしき)
あかくゆきさすくわりとあへをつけとせけいめ (四の君)
よちりきまつらひすそえらくまうし思 (このすく)
とをのあへるけきいとるをつゝきりとも人

おゝめの方へ　細下上の
玉織に源平夕霧をさ
してやり　孟夕霧嫁
同じくて玉織にはかる
びるゝれどもし
弓にた猫よりれハ
細夕霧雲井房にハいと
こゝろとやり

何ゆへの猫ぞと
其の殺しさ申は嫁要
ハ猫とも雲の殺され
ぬ人の中まで犬より
らぬるすみをちく
うまれきらくもて
細が気にハ嫁要こそ
猫らしくしけ出とく
きらふてもけるすをも
あらせ猫とく　孟内府の
仏まふ縁るすし八幡を生
ど源のふゝせあふて一服
しめそあるらしやゝふも
わしぢをもありますとく

とあゝをのひてんとしそのとわらり給つるよ。
孟夕霧と密通の事と
あらずなからしの給まれバいとはおしう
まこと
るん猫はあめの云ゝるゝぶ人あさいう
そくは猫とろめれども云ゝし猫ども。
嫁要ありてし
うらし人の中にてあるとあらけきやうに
るんはらへの猫にもあるぬゆるらひかど
夕霧のまあみも不て縁とく
よふ給ちの人のゆかりなんもいとをと
とならつとゆるりさしてゆすれらとくし
うめらしげありあるりよい猫めうるう
細好あやまりのう
あそあるらとそ出ろまぬゆうりむりひ
源おうくハ云ひ猫かしと
ねらけりましうう猫しそ。ゆくとさらうお
のまふく
げし云ある猫ん。

としらへはりてありしを
ことしかりしがあつるすと
花嫁要の義式あすじ乃
るらしかしもしかそあり
ハすゐしせもさべきとそ
ゆさうすきんてのらよまり
せそゆらんじまるらる
と　仏間前よ大夫もさ
やうのみしき御使すん
ねとし内府の御かし迎
し親金許大夫ゆ府のや
よの給へり
げまりとくらありきこと八
細されしそ云ふべかれとも
おうやうの事ハまそぐ
の大夫の御わやまちと
ゆべそれらく　師前よ内
府の云ゝ代あるすの給
ふれバいくロ称うらん
とのまゝる叔父よ　との音
かく
ふなりしらり　細
とらゝし給ひ所より　仏姫君
らせてしるすせ

源氏ゆかしもく
云しどもあひてゝししゆるしてゆるよのりてあそうしるとさこ
乳母どそくそろとるすとおく
しゆりげわりくしとゆまぞそし給らく
さて
めゆさるすきんへのくよまうそ給らんど
夕霧雲わゐぢのく
ろらしろうとてふくせふ猫うし出て　大夫のく
と義みもあり給をねしるれバおさ猫
細云ゝ
しう事てゝげゆうらの猫をとつるらは
大夫御く
あれどくけくも外人ぐのあゝ乃ゐかん
孟夕霧と雲井房の事と
ありぬしゝぢりけり。ぢまいとくらあいきこ
とハどゝよこそ出ましてあげくべく給れ。
二人の人と同じそしやうよのまふハらうするとく
ろれよつゞ猿出かとまふハうゞめしさこと
別して
よらんぶさりしゝらんぐしくまよひ給そ。
内府の出りぬるまもまきやうまとんとさくく
そとよ乳がいうつしぬぞしもそくれ

猶おもふさま紹とんのやうよ
ますらひて　かいやざいどけ
あさ人く々と男女のたる
どもわらんとふらひ急
ぎそむつねさ海そそ
しゝそてはるしもえりあ
そねかすれバのかそ
ようしらぬ人のこゝろ
つきそて　孟うしもありき
人のりふくろよ用心あ
あそていはろうさるすお
身の姫をとしく
人の所に心やけれ申ん
雲井雁の御名のけらる
ごさいわり
まそひらもふびひて
師　あわかもあるむくみ

ゆき海よ秋てあらんしもそてひしきられど
そひかれ姫げなき給と人のやうよゆかて　孫と夜をらんと
ひく。いそぎ姫ちんとれむしなつねこゝろまで
これらいゑのわのよろそと不審しありて
んぞそともられりハりつしいかおしれんよ
しぬ人のこゝろよつきそてさハざいげく出か　さかくしくつきさなへ
しの給をわらさるす。じあしきでしぬく　細 紹るさとかすとそ人のたかやうに
人の此なやうかれんとの給へバ何のかぶら　細内大臣の詞也
ことよりかんぞあるめうんでもかう　か ひと
のえそうりたてもよきずて
そくるかりんさるふべきある姫をいとく
ちなしくやさとりしびむあへらきしやとく
りうりえらうるく
さらまね。ひきれなんいつしうりても
くだわ一夜のなりしくめん

うしやつしんすびつつ
きけんと作く俺あつりと
あらんさてハましてとよう
くさげなきさみかどの御い
つきむすめ
細 硯獅の云皇康子内親
王の事河海よみてう
河康子内親王 延喜 村上
帝 御時 仁和 弘徽殿よ中り
あしろよ九条右大臣
まそてまゐる也給なるが
姫ま八形くまいり給

かられとさびひく。何ばかりあるむ川姫が
そそのんとぞひかげきあつり。姫ぎみ　雲井雁
ハるおよぶはあくて中きすりよきしのぞき　内府の
あつれど。いとらうらげるら此さ海を衣
ましかう給。わたさんといひなげしい恥き　細内大臣の詞　雲井雁
とをして
あくりのしあひれうとおもてぞいとく
人すくくよとおもひれう。これこそまさり　内府のこゝろのうち也
くそられりられとてはめれとぞうろをまた
孟 罪サキ乳母どもの認之　めのとも　めのとどもの記
さいなき紹りしさこえんなるしやうの
ことハ限なきみかどの此いつき姫ぎみの　むすめ
づからやまいとあし。ようし物語ゆもあ
細 媒 そでのありて作るハ書のなき
めれど。氣色をおもりつるる人さるへきこ

夕ハ関白太政大臣公季ノ
母也 世継にあり
まのはりてなしより
大宮めさん夕霧の御さちさき
引じいつぞて おふさしも
あさきとどめのとのさうを
しては なよりいとくら
とおもしてらしくうとく
細くしげうらりうりハ
抄此段はめのと達のさい
出まれてえ細く 孟抄て
舞ふらへうらとあて
清検もあくしげさやうよ
とハあきくしくさいと云説
わうさ今とそてもうらまさ
推ごんくと 抄えて わうさん
とくそてもぬ色なう今伝
ともうんとさいまぎれな
と世づきグあり こころう
もあうきとく
夏まうぶれさうなてろ
孟 夕霧のうらとうぶれさ
みうしきこハなきさとの段

同 ひまゐくこそあうめぐられハおもけられまま
雲井と夕霧の中のこし
どうまで年比ゆうしおしつうどなりまくハえ
けるされは程をなみ乃れめそてありしうらし
もくしても滿迎あしきまんとくらうとけ
くるしきこらしつうど悦としくうりうり
かけぶやうるうけりそあくよ故みく侍るう
よわうきんとそてもしらちさぶれなどいう
よそやよろしきうろんへとゆるすべうめうど
夏よふらぶれさうとうろゆとしまさで見え
進でごえうしきはそひうしきうけうつとこくど
抄内大臣ヘ陳ヶ申にやまさ之 細 内大臣の但
のがどらすけく。りしとぞ うらこと
りしけじうれおうせじこそしきあれど

いとおしき中よ与
師内府の大宮の志わざを
のあよハいとれしるあげう
乳母ともハつことるさきなう
まのあふをとられしく云定
お雲井のことといふしうの
あふハいとれし註云と
大納言殿よの御給りん
細 按察大納言之 雲井雁
のまうち父之 弄 雲井雁の
母按察後大納言の北方
よてよまうりあふよこそ
あうんとまゐづうく
めでさきみても 夕霧ハ
めでさきんへとそしもどん
すればそひもくあさきど女は
君よありあふなりとこそ
ねがへとやしく宮めのとの社
落たるう細く

今引とりて何とぞ一戯言にまぎらかせとく
らぞやりてあしぬことくじうるよいうひあきれ
内府の夏 雲井と添えんとく 八なめく
よ。今ううこうまやうしなりてんこやのれこて
細 乳母達をさしてのなうく
うのいとつしきがり。そこにらうハさらうと
をいとうれとしもゆとそれざりうんと
ゆのくをぞ
のまくハいとおしき中よとうれしくの給
めのとものおうへ
とさひてあれいとじや。大納言殿よ御の給え
んこと紙。夫ひうれハめでてまさみくも
雲井のをいと
ぞんへのもうらそうするのめうしころようと
内府の打掛あれどく
おまへうけんとこて。ひめぎこハいとゆきれ
げなうはこ海めくしまうづよやしあくべじこと
内府ゆと
くひあうべことふとおうしねばくらなうきなそ。
いうよ思そてゆうつくしうよめりてまふおぼしき

いかよしてく 孟 差ゆへよ此
姫君をとりてそこら
うれあらしうらさく
えあくのとく御しと思わるて
孟大父のいつれも除るが
ら夕霧を貞観ま思ふべ

りとよりつうこと思ひつき
あふ　細 内大臣ハ此姫君
をハ思ひ捨て孟まひしを
我こそかくやしまひそ
給し物をと思わるべし
此君よりかよ　細 雲父
とに あくハ此夕霧の
かとハ誰人をかしかべき

わざいとをかしかんしとおがべてさるべきどもら
のまで大臣をのミ恨みて、給ふ。父宮ハいとく
思しと思わぬと中ゞなと恥かしく君の御ためあし
さはとられ給ふやおもんかうんのありき
我もうけしうなかさらしよみきけなく
こよなきとしのやうよ変えしの給へるとお
どうとしとまべきわとりつうと思ひ
つき給ことすくてうくまそうつんとまて
思わしくさらしをこらかくすておそ
めされそこそ。雲井の御こととを思わ
うけあれはしてそんのさく

これよりとよひなりくん
さうよもとよりそ思へど
師 夕霧の心ある心ハ雲
井の雁まうり我まさり
て皇女をもとや思ふ物
とて大臣の御心中也
御文を給べしうらかえ
う出のへてとりふてよは
まうけて又る〜
御心のうちを 細大臣の
御気の御色を内大臣へ見せ
ならうそ〜とまう中よ
ふるなり
一種とハ人めなそかるて
孟一日也節をかなそ〜
時のるちなるべし
ついうかうん 御楽 せひら
沢 注是非不知之
まあぐらて 孟ハ雲
井の雁の うわゆへ

をあらハ此をらかるのみゆるへや
ハうらおりさ御よりてめて。たき〜
人おか御ささかれかとびあからむ
さそもよりてそ思ひて。けうらかしのま
まされや。中ゞどうしめし思ひ給て
給ふ御心のうちをさまりさくハおりて
いよ恨めし給とかくさハかりかんなも
きこそぞとさの御こと筋まて一種まん
めあけうて。さかへともえんみにとなり
めしかつひよりを哀ま思わし給ふそれ。
夕つうさかりしうかかりつ。父御いのひ
をうひしうあかうて。せうらうひ給ふ
まめだらて。枕給ふとかで給つかれ、よ

濡くしくはよひり
孟 夕霧に對してたまき
あるは内府の秋をさうて
おのとのおふせし

さくらく　孟 かやうにきこえ
ハへれど内府の根の事
をりのくそでにはゆゑ
らせあるとも

（細 大宮の詞）けしきよりも。雨のあしぐの音しんじて物し
給ふ。くハしきこえ給ふ。ゆゆしげなる（夕霧の事也）（夕霧の心也）
き心ぞしをさひそめ給ひて。人は物ぬす（のゆかり）
を給ひつきかんがみしまことうを
まうしじともへど。さうらふもまり給
そでやかし気んであんとこゝろこえて
ろよりれうこしのかたらずれば物をと（のんく）
ひよりぬ。故りそわりとてあそびごしよりも給（細 夕霧の詞）
らん。まうでうかたより雨よこりかゝり給ふ。縁じも（大宮の詞）
くもんはおじおかりあられはゞもし給
あべきこと給ひしとあんまふあるとて
はじめしくしへるをもしきを家よんく（夕霧の心）

こゝろはよゐもし
孟 夕の秋あられば花り
よ云ふしあとおつく
もえのあらはて夕霧と
くりりまふんとこふり
物まゐりあしあへど
あるの物まゐりえど
夕霧はきこえあさねく

風のをとの竹よまちと
うしれく
孟 風生竹夜窓間臥
月照松時臺上行　朗詠

（細 大宮の詞）わしうて。うしはのまりぶきよりいにしか（用意）
つとだうりあて。こゝのよいひあし給川。
いとく文などをとりよせんとのさゝきな（夕霧の心く）
めりとおほよいてとるげりし。物まいらなど
しまんでさしめのあれして。ねあひぬるうつ（夕霧の心）
あれども。雲めくくへもあ川まう福にて（細 中障）
りさうじをひけどれいいてとまさしるめ（子也師書竹のたとそ方のつぶやし）
あうもとゆねもつとさうて人のをとと
きん。いとうゝ見そく見てしさうし（夕霧の心く）
まうりうてねあんつるよ。女君をかと（貴心ノし）
さ凡して。風の音も竹に待とられて
きうそよめくよ。唐の鳴りうらて忍の

雲井のかりも
わがごとや　細　景也
我ごとや雲ゐの雁を
我が心ゞや嘆ぜずるの也
しらるらん

さ夜中に　細　夕霧の哥也
実て思ふさまの所　堅秋
の枕に雁の音にかの
きゝしられて荻の
八風の吹るゝもよそならず

雁のなきわたるよ。おさなき心ちにも
と。かくおぼしみだるゝにや。雲ゐのかり
もわがごとやとひとりごち給ふけはひ。
わかくらうたげなり。いみじう心もとなけ
れば。これあけさせ給へ。小侍従やさ
ぶらふとのたまへど。音もせず。御めのと
ごなりけり。独ごとをきゝ給ひけるもはづかし
うて。あいなく御かほもひきいれ給へど。あはれ
しらぬにもあらぬぞにくきや。めの
とたちなどちかくふしてうちみじろく
もくるしければ。かたみにおともせず
さ夜中に友よびわたるかりがねにうた

て吹そふ荻のうは風身にもしみけるかな
と思ひつゞけて。宮の御前にかへりてなげ
きがちなるも。御めさめてやきかせ給はん
とつゝましく。みじろきふし給へり。あいなく
物はづかしうて。わが方にとく出て御文
かき給へれど。小侍従もえゆきあはで。かの
かたざまにもえいかず。むねつぶれて
て覚え給ふ。女はたさはがれ給ひしことの
みはづかしうて。我身やいかゞあらん人や
いかにおもはんともふかくおぼしいれず。をか
しうらうたげにて。うちかたらふさまなど
をうとましともおもひはなれ給はざり

身にもしみけるかな
細　吹しをれ。身にもしみけるかな
秋の比とかく思ひ物し。とかく
我身に荻の上風身にしみ
こゝろのうちに思ひつゞけさ
るさ殊面白し
御文かき　雲井への文なり
あへてしも小侍従にもあはで
かのかたへもえゆき給はで
ぬと
かれこれさはがれ給ふも　孟　愚案
同前也　愚案　雲井雁のゆかり
也
女はたさはがれ給ひし
雲居の雁は内府の思ひ
しるよしを恥しとのみ思
ひ給ふ也
うちかたらふさまなど
をうとましとも思ひはなれ
女房達夕霧とのこと
さしめさいへどもうと
ましき事をおもひ給
はざりしと思はれぬ

とハ夕霧との御中なりける事を
まさりくきこえさせ給ふへきさて
細 よろしからぬ事いふまじきよし
地とる心ひとしくありや 師 夏ゆ
盃 葵の上の御事也
さまざまの人の心やすくうちの御中
をも遠ざけてぞその後を
つかひ出したるほどにとかくいひ
ど夕霧ハいまだいときなき程
にあらねどもとかくおもひ
のこゝろ也
地とくハそのまゝ
細 内大臣せ女御ハ雲井雁
さまざまにおもひて雲井雁
どわかれ方ハいかでか
らんとて
さえなくいふにこそむつかしき
細 弘徽殿の女御ハ雲井雁を
今よりはおひいで給ふを里よ
出し給ふにも雲井雁の
御局とも里へ出し給ひて
つれなくもありがたし

ざりけり。まさりざまなるべきことゞもを
我君さうざうしくとれも雲井のりつきそひて つれづれもいかゞ
おはしますなれば 久しく御ひゞきもなく 心やすく後の
むつましさにひさしくへだてさせ給ふ
つゝみかくし給ひて 夕霧十二三歳 かしこく思ひ 雲井より二歳まし 給ふ
なさけなきこゝろのうちに思ひけれ
うのおぼろげならぬこのまでも ひとしひの中にて おもひ給へ
ど、きこえしいさゝかもひたすら 大臣とし 御方に 御四君の雲井
いまいましきをとゞめて 盃 内府のかたりまつる事 心のうち
ぞはなはだいとむつかしきことに 内府様恐れきこえ はしたの
中宮のおぼえはひときは 内府四君よりの御子 秋好中宮 めでたくありつる
世の中にもありふりて こきでんの女御 御めのとの

ろうじうじいとくさうなりてさせなり
て、こゝろやすくうちやすませ給へ
そがようによつとめさせ給ふて
もかりまするれば、かゝるにもこゝろ
かく人のうち御ことさへ
ゆかしきこゝろのうちにめいふに
て、織まかりでさせ給ひ給へいゝ
されてさせ給ひていふにも
こゝろのうちにはこまめしるしき
しまつはれ雲井の御方にさ
してはおそひあまりへおか
けなりうちとも、やまとれといへ
さりがたけれ人へ立まさりてそのつ

くりはよくまつて
細 立后しそうけ出しどれ
雲井ハとらされて思ひ
上局よつうをきこえ
きこえも立たれば
しますぞ 師 中宮よと
されならぬとおもふともすがら
なさけかなしとも
女御の御こゝろの人の心のうち
も雲井のうちと織よう
ことしいとひ心も入りて
なされかたくいつうとて
まいらし給ひ
細 雲井
織はうちでさせ
雁を渡さんとて兄女御
と渡しまゐらせて
すがらくまつりけれんと
盃 弘徽殿の里よりうつり
まかりけれんとて雲井
を御つきて従ひて
さうぞう 細 御ゆかしくさ
しるしさうらんや夕霧とふ
つく説に 盃益氏 花日
花 鸚鵡のことゞもこりて

よあり角まてミそろ鐫之物のひもてかれさうと也まりそてとく物之礼記内則篇に童
みの父母につかふまつるには身にくしをかけ物の一さりさゝ下ヰは澄らにくゐつけざらく細
嗅の法ををあ月へし
とのつらしけちかきも
孟雲井と夕霧との交
らひのるつゝ
ひとり物せうまて女ご
細蒼上也 師 冠者の法細
や内府の雲井の雁をむかひ
ひにあそへしよのまゝで

ふにありとよふ 細一説に
かりこえふのおほにつけそこ
て地のあらきすもつくえて
ゑ細をうけて心のへだそ
おさき程にもふかとおり
いらしゝ 孟かくじれ心

わりつとてよはれかへといい
うそうえつてん 細 源く也
ひきうりてハいるき之 師 源
根て雲井をうらみまそ
いらさしく

あくしき夜 細 暫時と也
ひてあつけかくらと成
人をよしまてかどなる心
浅うちねしく 師 此猶
いにへ付て夫婦へしかると
そよ猶ひはさともして
座のまとよひまゝてなん
ゐづくる雲井雁をさる
しもとのまゝてふうるぐ
らゝて物へ此せます
とりまかく

らけげりさをおひゐるこ綾よたりよあ
まいらんとおもしまて、よそりよそりし吹く（雲井と夕霧の方へと）
給、（細 若宮なせ）いとおんなしくおぼして、ひとり物をと
られし女ごともなりまそのちゐひとさう
ぐしくうろ限そうらしまられう
（雲井二人を）このきえやえそいけう根のりしつきりのと
おひて明暮よつけたる花のむつしさまる
ぐさんとてもおひつれ、おひのおまへてそおう（雲井の人此は内府のこ）
そめかし多すもつくしんとうさんて名く
（内府のこ）だ、打りしこゝりて、（細 内大臣殿なと）心よおりずおもへさまへ
らうしくしい、しうすんおふおへしうしたで

りうきえさをしよかんふかくへだてそと人
おふとはいりそてうろへてん、由よさうき給よ（細 女御置物の之 師 雲）
（みまさをよ細とのまゝで）か世中うらめしげおそ此ばはまりて給よ
いとつまゝくま物ひえくしらくれで、
うろづつしう結ぶをとりてたまおそ（尭 居すみいち）（書と雲井と）
ひわざとりて、ちぐさあうとおひのへて
おんわりしき夜よりのし給とそ、ぐく（書説）（細 雲井居を）
さ、人ときりせぬまへかど、なまつのふへよ（人とまゝ）
とおひやさせしとやのへ、いくうぢかし、さ（大宮のふし）
ちよされいとくめきらしあふうを物が（内府のこ）
久をべきはらうかすくねよ、いとおうず
くらかしう物がされて、人の心ふそしきさ（細 大宮の此細之 師 さ多くよのしくて）

秋よりてぐらうとあり
大臣ふりもしせてぐるの
るすをそひよりおふるよ
とあり
ちさもてをハわくめ
おさて又夕霧雲井雁の
事ハさもあれとこし
ゆかりのりの心を　細　歎也
の中とてもおもひきと
世ばゆくハわのまひやりも
源氏このをおもひしける
ハ親方ひとりのおやぢら
よのをゆかひきつるをさら
らとあるへし
かくそでこまらり　孟奥入
有わまとを櫃てつまてあり
ありとるみえまちきき
あこくやあらんとく
此比ハ五節らう　細一月大三日
いりまゑよまろあるへと
ちしよあいせてちげき
なり　孟同
左少将少納言兵衛佐侍従大夫
細　なの御子也　作者ハ系
の内か納言作る程あそいハ系
図よもみえ(くや)孟
律よ奏へし
左衛門督権中納言　細　内大
臣の兄弟也別腹なり
御按察の息也　右大臣にあ
そのほどよるまく
左衛門督権中納言のも
なとし是も大臣の孫
なるへし
此姫君　細　夕霧よつき
てハ雲井雁と大切り
也　ひのそこまあもし
まふるへし
殿いまの事とよ　細　内大臣
葵上のそこ夕霧のこと返せ
給ひしとこれろよ思ひさみ
とる人こらして奥孟同

地ハあれど、とうゆきちかきこんだるを、はもいまへご
てらうとおもしろけりことよまきこさきを
こそハおもしめ、地らぐの地乃こころとゆかう
ちりまめびありくるれどもえんじてゆくぬ
てまちし給へすりこころぐちぐ見えうしろ
やもごこしもあらじと折あきらて乃給ふ
わりしと心ぐるしきの君来ありめけりく
このひまなやと皆ろハあとけう日のめき
給ちり内の地らぐの車のわれバうて
ろのみやみつくるすてやよしくくれて
わが方よりねまく内の大殿の君達
左少将、少納言、兵衛佐、侍従、大夫などいふも、
みなここにまいりつどひたれど、左衛門督、
権中納言なども、ことはらなれど、故殿の御もてなしの
まゝに、今もまいりつかうまつることねむごろなれば、
その御子どもさまざままいり給へど、この君に
ひとしきはなし。大宮の御心ざしも
ひとつにてかくしつき給へど、この姫君をぞ、け
ぢかうらうたきものにおぼしかしづきて、御かたはら
はなたずうつくしきものにおぼしつれど、
さうざうしくおはすとて、殿は春宮に参らせんとおぼすを、

いかうひとすさまがくさ
細内大臣の御身也がくて
夕霧よ由ありてもあるべ
きうとハ此ずせざく悉れ
も日備とし 師夕霧
とうくおりそめさるを
云うひろさるすとらかて

うらよ系経てダつくさむうへよあら侍る 雲井とさくし
人とそおまぬいふうひるさゝしとさあざくら
かよいひすしてさそりやあくるけり 夕霧の古住のかるよう
さとば我いとんやまり夕霧ぞ人の御行のさ
うしろのくちくあるりるんまうさをすく
ことすて其の経んぞしのふうさお中くまいん 細夕霧の志を
とりむこさをとこさるめくゆうなともごと 今さら
さふなちやうよおそあしてこそあくるめ。
孟 鄭諫 師 只今のかくのさ
せいしいさむとも一所かくいむさるさん
のまくよこゝろすしうへそあくめ家もよ
とめあうらよせいしの経こともくとれ
がらば。み此の御の進しゃよしこつけていてよ

こゝろもうしこゝろも
四君ゆるを家あるを 女房
の姉みくえあすて雲居
まのけつくかく 細 内府
あがく名くよ住まゐ
よ文をなりまかて
ゆくくてそうくゝよのみ
お文細く 内府ころ大宮
へ此満心あり雲井ノ
居ハわが志をとこそまゐ
らんとさ

あり先くなさよりみの経き
大宮の此年寄へ雲居
の行末をみるおり
さうとこそあげされ
今夜余の本此別て思
うあね也すきく

ともりしこゝろもかいくうよいひあすてゐらくし
経世夕り。宮の御めてよそて。也ごこを頼も 大宮し
し経りめ。君ハさうともとらぐしの事かくる 雲井をと云
もり経んしむけりてとうしあんと世のし 大宮の方へ
あへきべいとおうしけりよあさつくろひく 雲井の事し
もさらのまくつり。十四よあるんおかりけるこゝろ
あまらしまへじいしこゝめりしうきおやう 細 巨の家ところ
よう打らしさ酒をまつりかくるくさけ 大宮
あしどゝ御言のりくあまびゆまよ呼ひと
えつらせ。さうくくそとあくくぞさう乱。ゑ 孟 雲井ノを生れして
りすくるとさしくらひの経めくれ世経を 雲井のく
さる別ねじさくく。今あるそ出ひつれ。

見捨てかたきひまなるや いづちいらるらん　牡丹花院に
云かりしまゝを示にはまり
給ふがらく敷かね根
の切なりしく李陵別蘇
武之時携手上河梁遊
子暮何之ともし文弁相
似たり

まのいこよ盃よ
盃　内府ハしぞくしあはせ
らうしとも閑因ありあ
なし夕霧のめのこの書
料へやし

のいろみんを
人目をよみならくの時
しそめれと夕霧のこと

今さらにまた捨てられがたかや、いづち
うつりしとはかりとこそ衰ふれとて夕さ
給ひ。姫君ハおぼつかしきことをゆかしとばかりを
もりげ給ひぞ。さくなかさまのとかくして給ひ。
ゆらしきのはれめのし宰相の君いでこそ。
ゆかしきもしそのこゝろのしきをつれ。
くらかしくいうらを給ひし。扇ハことと
ざ海よゆかしなるらしゆるてまするを
まさうよゆかしなりびを給ふなどさうめ
きよせれば。いよくそうししわびて、
梅との給ふぞ。いぞしあうしきことあさき
こしられぞ。人のれもしをすこせのにて
さゞめかさくしとの給ひ。いぞや梅がめしとわ
れづりさてし。さも給よ侍めりうじまうと
をげわりるや。人よとりきうくさを
すみどころしめしかをくらし。あまくや
すまさまてゆいふくきさの君梅のうへろ
よりかみて給よ。人のどかめんのよろ
ちさ時そそくるしきうかれい。こくわぞ
ぞて、激どしのびつゆそすゝろしさと。
はめのといくしぐるしきもとて、ゆめよせうく
そうしもぞうりて夕霧のんそうもひ
よ。対面をさせまうけてまゐりのとい
こしくもひつかまるて梅をいとぞおほせ給。

さはがれ　細さはがれはまたさわがれともよむ人もあり孟左府入道ハさがれとよめりさりとハそれあしく　師説まづもちゐるべしおひさうんとハいへど中をとりてハなれずしてきこえん

おほとなぶらまいり殿まかで給ふ　細内より退出　おふ〳〵あるいハまいれば前駆しもかなたまふよく〳〵それかて内大臣も禁中より退出なり

御けしきのいとつらければさばれ思ひやみなんとおもへど恋しうおはせんことこそずちなかるべけれなどてすこしひまありぬべかりつる日ごろをよそにへだてつらんとの給ふさまもいとわかう哀げなれバまろもさこそハあらめとの給ふ恋しとハおぼしなんやとのたまへバすこしうなづき給ふさまもおさなげなり御殿油まいり殿まかで給ふけはひこちたくおひのゝしる御さきの声に人々そゝやなどおぢさはげバいとおそろしとおぼしてわなゝき給ふ男ハさもさはがればとひたぶるにゆ

男ハさもさはがれバとひたぶるに　細夕霧ハかくしく
ハ夕霧のかくしてもさやうまりてさはがれバ一向にくるしくもなくおもひなして雲井一人のことくんとまりとゆるしまうさぬあるべつきるやげに宮知らせ給ぬ　細宮よきさまつねようあかしハそらじとしりつくめのとことはのはじめの六位ともせよ
師夕霧ほの聞てもしかとしめ雲井夕霧の方へめる六位などの人ハ不足なりとて花もなくをばまへの如くとぞ

るしきこえ給はずめのとまいりてもとめたてまつるにけしきを見てあな心づきなやげに宮しらせ給はぬことにはあらざりけりと思ふにいとつらくいでやうかりける世かな殿のおぼしのたまふ事はさらにもきこえず大納言殿にもいかにきかせ給はんめでたくとも物のはじめの六位すくせよとつぶやくもほのきこゆたゞこの屏風のうしろにたづねきてなげくなりけり男君我をば位なしとてはしたなむるなりけりとおぼすに世中うらめしければ哀もすこしさむる心地してめざましかれきゝ給へ

これは紫の涙に　抄 袖の紅
みどりも涙の紅よりも
て色あさきとなり
師　あさみどりハあさ緑
のことをのたまひしびひ
もみどりハうらくいふ紅と
云てうるとうるうへ
なくは　細　うくゝ細く
は人のそでおなふるら
なりうるみ色は深くなる
衣なりして　師　多くにと
なりうるそれなりといへん
あさ井の衣そとは
いるはあらそれなら井の
義そしと云なく

細 夕霧哥
紅の涙にふかき袖の色をあさみどり
にやいひしをるべき、はづかしとの給へば
雲井哥
いろ〳〵に身のうきほどのしらるゝはい
かに染ける中の衣ぞとの給ひはてぬに殿
入給へば、わりなくてわたり給ぬ。をとこ君は
立とまりたるも、いと人わろく、むねふ
さがりて、わが御方にふし給ぬ。御車三つ
ばかりにて、しのびやかにいそぎ出給ふけはひ
をきくも、しづ心なければ、宮の御前より
まいり給へとあれど、ねたるやうにてうごき
もしたまはず。涙のみとまらねば、なげき
あかして、霜のいとしろきにいそぎ出

ぬ。うちはれたるまみも、人に見えん
がはづかしきに、宮はためしまとはすべかめ
れば、心やすき所にとて、いそぎ出給ふなり
けり。道のほど、人やりならず心ぼそく
思ひつゞくるに、空の気色もいたうくもりて
まだくらかりけり
夕霧
霜氷うたてむすべる明ぐれの空かきくらし
ふる涙かな。大殿には、ことし五節たてまつり
給ふ。何ばかりの御いそぎならねど、わらは
べのさうぞくなど、ちかうなりぬとていそ
ぎせさせ給ふ。ひんがしの院には、まゐりの
夜の人のさうぞくせさせ給ふ。殿には大方の

霜こほり　細　京極…
三四句殊勝也　孟　空も
まう結も同じく涙より
うきくらしたる也
大殿はことし五節を
細　源の五せちたてまつる也。又
藤原惟光が女を奉るなり
花日　師　五節の事　公事根
源・河海に有。毎年十一月
に五節の舞姫あり。若
ねの日に見え云々。五節の舞姫は
者大嘗会時五人、新嘗
會時四人云云。大嘗會
天子一代に一度あり。新嘗

會五年くゐるゝは五節ハ例ねの年ハ公卿より二人殿上人受領より二人四節之代始
まハ公卿二人殿上人受領三人五節也今年依為新嘗會若四人歟公卿二人者按
察大納言左衛門督也殿上人受領者良清惟光也云々愚按られハ惟光受領にて
よりてこゝしの宮おもしろ源のさまそてさて
さうしき事　細　去年ハ薄雲
の諒闇也今年ハ色あり
よきらんそへくさうをと
くしくろし
按察大納言　去年のまゝ
文ありべし五節の舞姫
をおほせんくせし
ふたつの豊　細　兼之の兄弟
也是公卿なり　何内膳
の事く他腹とある
人の子なり　細　五節なり二
人公卿なり二人ハ受領
なりよりいださるゝ也
まそらんのといふ
河受領の今ハ殿上人なり
まはらるれば上の五節を
まうし　其一説殿上人乃
まつるもの　ハ大内よりの
けふし

ことども中宮よりも童しもづかへの料などえならでたてまつれり。すぎにし年五節などとまれりしが、さう〴〵しかりしつもりとりそへ、うへ人の心ちもつねよりもはなやかにおもふべかめる年なれば、ところ〴〵いどみていといみじくよろづをつくし給ふきこえあり。按察大納言、左衛門督の、五節は良清、今は近江守にて左中弁なるなんたてまつれる。みなとゞめ給ひて宮づかへすべくおほせごとことなる年

例あめ給ひし君御殿の
えみえみゆへり河海
よみしより
殿の舞姫惟光朝臣の
其同惟光女ハ源氏のやぐ
のまつりせられし歌
又受領なり一説これハ
受領なり但源氏の志
よりてうちし中略
うしい事は　孟　惟光が
此姫を参らせんとすと
いふいとく幸せし公
かねらしく師の五節は
おもしと遠慮にあつく
あそんのいつき娘
ハ我もとめまいらせんとて
といふことも何れども
按察の大納言もかつて
の宮づかへをすゝめなり
其のむすめをたてまつる
つかひくゆるのしくハ
おとびてとハとめてを侭
まつへをさせんと云ひさ
つと云説

なれば娘をおの〳〵たてまつり給ふ。殿の舞姫は惟光朝臣の、つのかみにて、左京のだいぶかけたる娘、かたちなどいとをかしげなるきこえあるをめす。からいことにおもひたれど、大納言のほかばらのむすめをたてまつらるなるに、朝臣のいつき娘いだしたてたらん、なにのはぢかあるべきとさいなめば、わづらひて、おなじくは宮づかへやがてせさすべくおもひおきてたり。舞ならはしなどは、さとにていとようしたてゝ、かしづきなど、したしう身にそふべきは、いみじうえりとゝのへて、その日の夕つけてまいらせたり。殿にも御かた〴〵の

さひらうしなど
ことの夕つかたし

御帝よめして 帝の御前
して試あるへきことを奉ら
しを内にも源の御前よ
てあそびしらく
今一品のれう 細 あらへ
きみのあまたさふれど
とふらもまうせよ
こく 師 工 御の御らん
じてくえら出して
あわされし者へと奉る
こうらせて御らんぜる
されてる 同さにあり
てそ おうるハ宝寺九
るし何も林鉾のきう
べらきとえりおしうちと

細 さひく里ふかく沙汰せらしや
師 これハ醍醐天皇秋の御製なれハそ日の夕とかきて示すなり

わらハじもつうへのもくれうとし給らん 孟 源の君
ぜすつて じんへえりそくぐらどもいか
どくよつけて いとゆとしくしげなり。 御まへ
御前よめして御らんをんしらあしよ御
前さりこらをそしてきこめあふさをいふ ゑらうゐみ中二之
とありひかりくやうわらへのやうさい
かうらを着てさうひく今一品の人 ひとうま
とられもりするやうにてまひ給ふ。
ふでりそてすひいまうりてそえてう 世
ひよりりゐべく 細 夕顔也 の 是は源の心ゆへし ゑとくどり
くりのなきとこされこまうれらくけしいてこ 孟 若し痛く

うつけものすらひ
細 継母のありひとさけ
まふかり 御 源氏の心
ふかう

そへきとしまでるかめかしまつるをかりや 抄 字同しとある
あすさむしとそあらくまうされおりてき給ふ。
かたりうらいハめでさく御しけあくさ 夕顔のこと
やうなる御めいまうれハすこうき女房なと
いつとかりしときおりくの御うくさよいこ 細 此上の御方
ものまへよずきむ物ちうそとりてあり給ふ
どうずからうすひいうよゆふやすよう 夕顔とよ 源氏の心
ありろ人らしくしくれハてうらみのらも
けどきう給ひまふ山りのくまうきれなり 此うちまれるかつきのあて
ようあしふるすあり。霧ひめりしつきゆつ これ
してつまどのきよ屏風あてしたてうち 同し
そめかたしひるまで。やとまりての 夕顔也

いまもとうしそびやかに
孟 舞姫ハ雲井より
かさいさうらく

あめにますとよをかひめ
河 大みてぐらハわがにハあらず
あめにますとよをかひめの
みやのみてぐら 細 天照太神也
ぐら 細 天照太神也 舞姫
ハ天人にて舞姫
と云 我かんざしをなら
へそうじ心ざしをわするな
みそれハ標をさす也
スルしるしの事 神事

ぞき給へばなやましげにてそひふし 細 惟光之女也
たゞかの人の御程と見えて いますこし 細 雲居雁に似たり
そびやかにやうだいなどのことさらびをか
しき所ハまさりてさへ見ゆ。くらけれバこ
まやかにハ見えねど ほどのいとよく思ひ出 雲居の事也
らるゝさまに心うつるとハなけれど
たゞにもあらできぬのすそをひきならい
給ふに何心もなくあやしと思ふに 細 心もとなく思ひたる也
夕霧詞 あめにますとよをかひめの宮人も 孟 少青表紙本
わが心ざすしめをわするな みづ 惟光女也
がきのとの給ふぞ。うちつけなりける 孟 誰ともえ思ひたどられず
わかうをかしき声なれど 細 公女のとよ

せよりし 孟 青表紙にハそこのつる姫とあり
侍従大二段かりしまりて
ならくてしそ我ハ純ね歯もれがきうに
らんとミて 細 延喜式神名帳云 豊岡宮トアリ
ミつかきの
よつ紙かの山のみつかきの久しき世より

細 五節の日青衣を着る
之 余勘ニ云 宇治左府記ニ仁
平元年十一月十七日癸丑
晴 今夕五節参内 師長
来 聴 直衣之宣旨 束
帯 参入 以面目 仍不着
肉之業 五節の時
上古ハ青衣を聴 其後
者も公卿ニ青衣を聴
とみえたり
私 按 行業之男

きに。けさうじそふとてさはぎつるう
しろ見ども近うよりて人さはがしう
しうなれバいミじう口おしうて立さり給ひ 夕霧の六位也
ぬ。あさぎの心やましけれバ内へまゐ
ることもせず物うがり給ふを五節
にことつけて直衣などさまかはれる
色ゆるされてまゐり給ふ きびハに
きよらなる物からませてあざれあり
き給ふ 帝よりはじめたてまつりて 冷泉院 夕霧を

五節のまゐるぎしきハ
花十一月中丑日舞姫参
入或暁参御帳台試ト云
寅日御前試卯
日童女御覧辰日節
会舞姫進舞装
束丑日八青色唐衣
寅日八赤色唐衣辰
日八青摺唐衣赤紐日
蘰男子也青摺ハ小忌
也
物きよげ　細 草子地也
何事もよそへてしる
なし

まひの舞姫　細　上古八五
三也今年八年もなけ
ればなり
げに心ことなる年なし
おの娘をみやづかへさすべく
仰せごとことなる年なれ
ばかり

てならず。世にめづらしき御おぼえなり。
五節のまゐるぎしきは。いづれともなく
こゝろ〴〵に。二なくしたまへるを。舞姫の
かたち。大殿のと大納言とはすぐれたり
とめでのゝしる。げにいとをかしげ
なれど。こゝしううつくしげなることは
猶大殿のにはえおよぶまじかりけり。物きよ
げに今めきて。その物とも見ゆまじう
したてたるやうだいなどの。ありがたうを
かしげなるを。かうほめらるゝなめり
例の舞姫どもよりは。みなすこしおとな
びつゝ。げに心ことなる年なり。殿

乙女子も神さびぬらし
舞姫の五節と云ふて又
又　細　てんしの五節の
めでたくかはりの五節の
身をとしのかりかね世
に御かうきよのことゝい
源氏のつかはされし
年月のつもり　細 久し
くと経をへて御有るを
あはれおぼしたり
かけていへば　細 その日を
源よかうなりしと語る
よそほひせなるらし
礼服の日かげを日かげと
まうくお言はの舞姫
日かげのかづらにて
まうもこれはうつくしき
白糸をむすびてうる
ゝ袖にもかけしみる
由にいへり

まゐりて御らんずるに。昔御めとまり給ひしをとめの
すがたおぼしいづ。辰の日の
くれつかたつかはす。御文のうちおもひ
やるべし
をとめごも神さびぬらし天つ袖
ふるき世の友よはひへぬれば　年月のつもり
をかぞへて。うちおぼしけるまゝの哀を
えしのび給はぬばかりの。をかしう
おぼゆるもはかなしや
かけていへば今日のこととぞおもほゆる
日かげの霜の袖にとけしも　あをずりの
かみよくとりあへて。まぎらはしかいたるこすみ
うすゞみさうがちにうちまぜみだれたるも

あそびりのこと 花 帝よろこびを 細 辰の日ハわざと文とさる方よれよおひらうく 河 あ
とぞりの紙とハまゆき紙よらしとりそしりんと標らうし 畧記之
人の程よつけてハおりしと 思らん
思らんもと 孟 公主ハ今まハ花今と 源氏の心
此後人もうかたり
人のめとまうにつけても
師人とハ公主のるすく文
意のあま くるうく

さりとも人の程よつけてハおりしと思ら人
どらもざの志も人のめとまうまつけて
（夕霧之）とも人それぞせひありきまへどおもらち
（河 おぼやかなりけり）くらうゆこきぬすいとけしうりそぞすさ
（夕のやさしふるれども）れじかれつゆうき程の名よハるけうし
（柏木の心）（夕のこ）うそやうぬりうつしもいとくまようちそ
（紙 雲井の雁也）つくこん人のるすくのめよもこらねぞこまて
（もまて内裏よく）んやとおふやうくうれとくめささきとひく
あつく人をべうさけ物さありくれどおほさび
（良清が心）いかりそてききそておのいうしさけのしく
（柏木之）川のくくしんもるよくしいどしてしもそて也。

まふそのハうしうれ
何のまれ帝紹の親王よ苦核
まもうて 細 公主ハ内理
かて核をもうてうに
思のあるにもせて出るあり
新發意有勝前斯院退おどけハおうす拳膝ニ依テ候これ
みるけちとくうる 解
除也ふ節の雑腰うしくて情
の様これまやひうまくへ
作り
まめ人あそくぬと 細 宗子
よハあしざらも也 舜 宗函
御割あり・寛平遺誡ニ
云令須公卿之中令員
二人ヲ雖非其子必令求
真言云 お中へ子とどめ
ハおれも 不節ままらり
しかすり
内侍のまけ 孟 柏木が女を
典侍の関よとうくし
わぶとのるすよは
お覧と雲なことさう主
てふよハあり様ともま
らそうらうと云さ

大納言もこしけつくよ余りこもべきさよし
（内大臣の女也）そうもさせまふ名案つ勢を人ならすてねね
（細 公主よまりのるる也）とまりて、とどめるれど、それもともくめ
（柏木之）さとまふ川のうこハ内侍のまけおさまらに
（浮舟之）（夢也）とゆさせられバさもやいうこうくまりと
（細 夕霧之 お 是つるをんるをを）大殿ともかりひさるを。この人ハさうておそぐ
口わしともふわが年の程くくるなとう
く捉げなうしくひきひてまし親王と。
物のふもありとしきよ急くれでやさころん
（細 雲井）こしさ。わざとのことはおくしつかうら
（房の少く公主たへてとし）（細 此宮姫の見）をへて渡くまうておりくありがもくと
（手たり）（夕霧のこと）の。かくハ殿上すう。つくまこのこそて八条り

まうしけ　細 御使之孟入道右府云まうしとをさして夕霧のまうすことのよし(同)

ふるまひも　細 くものをハ又をいはんとりのまと、ハらんハどうどし 孟 夕霧乃

むとしへおもひけれ

ひらけける　細 君云々、ひらきたる所日ごろの事ハくるしきのけれハいとくるしきいかり日数ハひらひらをいるのまゝ日数ハ猶どさやうにおもひたる物なれハかけしかハおもひつるそみちのをとめる也

西のかたみくらにおもひて　細 御使之雅ぞなきものハ所服之の名残ハまことに

川ぐちまつよ。網よりもとるのしらかくし
ひさしうまかでて。なさけハいかならんハ誰かと同
のふ　ぞうとの童兄弟し　ハ世の御ためハ世の御ために夕霧同し
いとよりけしのハ。もどろまつこそあらましかれし
まうけつねもころもんをうしやすしことよ。
まさにまでらんやとのまへどいづそうさは
夕霧方よし
らんらいまうをえてもえ。そ待ちけんどのこ
細 兄弟し
孟 兄弟も
つうりかころそちくもよを待ちくぬれ
されえ自由ならぬ也とし
男女ハ避とるの義し
ていのそりえぜのはれらんどきせんところ
よもきらバ文るゐまよしてうまつらさ
夕霧同し
むく
きしくうやうのこをいふりのとくし
らうハのへし
まれど。きぬてあんへバいのと申しくそてい
ぬ。年の程ハきれてやありまさんか。夕霧
夕霧ハ女のうとをうし
の文をし
細 六位の衣よりれうゑ発孟同
ところ。うどりのうをやうのこれまうし
ここるめいろよ。まそまさいとまうろれ
どいひさきそていとをかしげる
夕霧の
日ごけみもそろうりいろめやし女子があまの
又昔ハとりして云々
の御袖よりあしらて。ふかうきろ程にも
細 兄弟く
細 兄弟の心し
ぬしふとしりさうしうをちそろしうあきされ
大臣とき
て。ひさくさず。あぞのかこぞしてこ
雅光同し
よ。坊りてあうそてぬとうふかくしぬまさ
雅光章を私盤まうし
まへりうふくめぐぞまうことよかそいくと。
らうハ御同し
しびにおそしいぞしくへバ。厳のつまさの
雅光とふし
ききのしうくの路てまつるとのへの(ハ)かるが

殿のくわんざの君 細 源氏
の御子を云也 細 夕霧を云
る也 弄 師 惟光源氏
のこゝろをいふ也 夕霧
もさぞあらんところ
をやりていふや
これのこゝろよなり
細 うちよりいづるも皆是
也 孟 惟光がうくは
すてもいふとむろし
くてゐるとみえたり
らうらうし
あの人ハみなとしに 箋曰み
其へのるし 明石の入道ハ
夕霧のこと 師 夕霧ハ必
其のゆへさらうもまれ
まゝうちなり

なくうちゑみて、いかにうつくしききみの御（惟光詞）
ざれごとぞ。きむぢらは、おなじとしなれど、（細 源氏也）（夕霧と童と同年也）
いふかひなく、はかなかめりかし、などほめて、母（夕霧をさす）（惟光室）
君にも見す。このきみたちの、すこし人かずに（惟光の詞）（素なり）
おぼしぬべからましかば、宮（惟光の娘を也）
づかへよりは、たてまつりてまし。殿の御心おきて
見るに、見そめ給ひてむ人を、御心とは（是れ 源氏の御心）
わすれ給ふまじきにこそ、いとたのもしけれ。あかし（もゆる上のやうにやおぼしけん）
の入道のためしにやならまし、などいへど、
みないそぎたちにけり。かの人は、文をだに（孟 是よりハ雲井のかりの事也）
えやり給はず、たちまさるかたのことし
心にかゝりて、ほどふるまゝに、わりなくこひしき（助字也）

おもかげに、又あひ見でやとおもふより（雲井のかり）
ほかのことなし。宮の御もとへも、あいなく（大宮の事也）
く心うくてまゐり給はず。おはせしかた、（雲井の雁）
年ごろあそびなれし所のみ、思ひ出らるゝことまされ
ば、さとさへうくおぼえ給ひつゝ、またこもり（花 二条院家と云也）（源氏し）（花 二条院）
ゐ給へり。殿は、この西の対にぞ、きこえ
あづけたてまつり給ひける。大宮の御世の（源氏し）（のこり）
のこりすくなげなるを、おはせずなりなむ（夕霧を也）
のちも、かくをさなきほどより見ならして、
うしろみおぼせときこえ給へば、たゞの給ふ（夕霧を花散里にあづく）（細 源氏の御詞をよく承引し給ふ也 花）
まゝの御心にて、なつかしうあはれにおもひ（花散里の身うへ）
あつかひたてまつり給ふ。ほのかになど（細 夕霧の花散里を見給ふ也）
見たてまつるにも、かたちの

ことへらく 細 雲井雁
のことを思出給ふ事を
やらるよ三条の宮を
相しくおもはす也
との給ふのさへ入り
細 夕霧を花散里にあ
づけ給ふのことく
かしまへとき 師 花散里
ハ二条の東院のみ 西対
に御すまゐし
大宮の御世 孟 大宮の御
齢のゝこりすくなげ也ハ
花散里へ夕霧をあづけ給
ふと也

わらされしや　央お室役
の御之花散里の孔ようらぬ
ももらへ下され八源の夕顔の
外ほよんひへつゝき雲井居
と急ら八わらさろしとく
んらんのやうしやりくり
ろらん　お花散里の八
へらしとぐ夕霧のとゝるゝ
まらこむらひてみううひ
細夕霧の花散里の手を
とらへあふく　孟んぞへ乃
やりくうらぜらりを
まらどろうそうらむ
うひてろうよくうらあ
くそてりとの役と
夜のさぞうかうれくうら
源んと　お花ちる里のくら
もくれねど源のさしむき
ましハ志ぬんねるとどそり
く御ゆかたらり　細几帳の
へぞうとさう豊ハ猶くそ
よろこぶよろこうくれう
まきこしにとゝるめらし

源のく御ゆかりくへかりうんハとらへどゆくよおりめりまも八た　孟　源ゆかハ旅く若ふのケさう
おわさ又若ふハうるそてきわるみどしくうさまれだつぞそのあつさとしふもて身そ
花　若菜花の紹介云御口さぬのうさかりしうら祢しいのと御ゆかすや。のらん
いくへとさうりぐくし云く
太宰のさうしくよみうしまぜどよごひとさうら
のまうしにまします　なり
くそしらやしきさうり
お此後夕霧の名と舞心の
家して出ゆらん

孟　出家の捻うり　細　はそぶくうら

と。ううらのまうりをうしすると申さうしろうろ秘。
うれおんおとまとんいとひすて給ぬぞうりおろう
まどうがあるみがらよつくきひとの流くさ
うとさうろようげくさひしとら乃ことあ
ぢきるしやらぐんのうやうよやりくるを
らん人をとしあひそちめと血のふゆうきむ
うひまくろうひるりしんといとおしげや。
うくてうんへまひよりれど。顔のまやくかちら
れくうらばれんいとこまふくくそ御ゆへぞうり
の人ぞそさしうへつ。あまくれとぬてる
しゆまゑうりゆまふめうよもじべうりうりと
おうんのしうぞそうげりしうりけら。みそめのう

さらとよほうしませどもぎいとこそよ
らよ拙そうしうてみもうしとよふとも人へ八かく
ちらまきわとのこと観ろうれまくるなどもとらう
とうてしもぐれざうりくうれけくうらのやくさむこち
らうさく。やさくよれぐしもうくあうらを
どうがうくそうしうハしくさわりうりくうり。舞の
業のくれし　嵩ゆうむ月のれさうそくなどもふめハしくぐ
此恙一脈のれこしとど。まじ写しとあのういそ
ごまふおゆるさらうりいとこそのくろよ志さ

みるもものうく
お六位の御装束なりし
なり

てまゐるところもものうくのこゝろばかりなれば。（夕顔なく）
（おゝ御としよりのさきへたし）御かたちはよしともしらへまる海（同袋く）
じつ思ひまふばかりおもみてうつくしうぞ給
らんところしまんで。あはれそてうてきしおもん。（孟人々の隙を答し）
老　地ひとり御ぞわれさん人のやうみえものあ
（細夕顔の御こと。お雲井のことを云あまりて言）
これとのちまへだ。地ひれど御ぞわれさら
からをすうやよひとりごゝちて。打臥ぐ
（大ゑんかも雲井のことし知あかさ）
まそねまうぬのよくぞ若まふなくんとし。潜
いとくふかしうて。友もうちひそとまひ
（細　官の御こと　孟教訓御と）（下臈之下く）
ぬ。地ちくいくらおしきそのんぞまん
をしうつこそつうるれあまりさめや
うりのくなりのしまひそ。何りかうるがめ

何かは六位なるらし
孟夕顔花葉云位ありく
とく云しるけし師伝
六位といはふ大まの雲井の
るけど夕顔の思ひまふ
ゆへしけ思りてのまふゆへ
伝いはやうのうすと
給ふんいから男の位ひく
こころゆへ人のあなづれハ口
おしきよのまなし
細へてそね
細　源は紫上の方にいても
あしかりすあまりとのが
うしろめたきくなから給と
みずり　愚按　能文能子乃
中すくねとも事く云
悩さ世まかしと

がらよぞひれまづきて。ゆゑありとのあふ。（細　夢の御句）
何かは六位るもじ人のおれづりかめれだ。（やそ言ゑとかりゆゑなれともく）
ちどしのことぞなふまうれどとらへ
ありきちくてなん。（細葵上の文之）加地しかうてさ
おしりがはしろふれそも人ゆはあみづ
られ給しぶ。地へいそてね釈よお（忠言表此）（源の事く）
ともれどいとしけくまてうとそのから
地御ぞれ。おそしまむすあくうらよぬやを（細こまぐ云々之表巧）（源氏のく）
くもあるれ給しず。ひんがしの院まで
のこるん地かへらく給ふ。西いの院のこ（発　花散の住方などく）（細　花ちる里之お夕顔と公よそ）
（まつし）こその義に物しすへ地や今一所おつ（細　葵之と）まさ
ありがおまことぞ思ひ給へまつしとそ。

そひつれねさ侍り
孟子の胡之行事も
自然のごとくせむとておれ
いさのことくまなる事まひ
そとくし
かきうすさうけ 是薬 こさう
ちかくおちうれ張よ今へ
古今集よかきうなさ之ひ
為おし地ちむいとしめう奇を
何樂面居よい秋さのむ之ひ
まわふしわうおう[illegible]よう
まひ給うや
むう、まうちうるり たまへ
内府為政内在令の内のこう

波のおつるを海ぢうしきてまつるなとしきいは
ゞじうし義などに文(太文にし)いはしくけるくと注
まひて、(高宮胡之夕第と云ぐさめてのまふべし)さうにむとくうてんへくて浪じくるに
つけてさのぐこしてそ義るれじとの所かう
すきくるに(成人をれいへしめおうしめのそくし)人へしぬぢらぬれいぞろさるに出
みへもなさされさなるにあひられねさ侍るに
てと抽 しりへこ(放板政のうすし)地しぐの今まつぢらしぶるも地
しまへうじうさうるさうげ出ぬ法 (直源のうすし)地るずこと
とよのをこそ申れどそふよえれたぬことの
地宿るられ(内府のうすし)内の地くのてろざへしるずべ
てのへにいわしずと世の人へもめそいそされ
ぢじおうおうしのぐしゃしほしは今下

ゐこそうも 細 源氏三家
也左政大臣そていさ乙ニ年
どうもおるみゞうよお仕
せぶうし但中古以来ハ
節会よ看もろるう者
らしわさの地らぐ 良房大臣
細 忠仁公也准三后、忠仁公
こうしめくし白馬をこうう
宗勘ヘ 源忠仁公覧白
馬事旧記所見未詳云
但字治関白以彼例覧
之然者勿論於白馬者
引諸院宮之故也忠仁公
依為准三宮宣旨被覧
之欤宇治関白同之仍源
氏左政大臣日称准三宮
覧之者也
うらのぶしこさとうって
花内の儀式をうつさハお
ぜさるを引よたる寮の
はいし下仕奉るう儀式を

うすらさもうしめしさるに地ひさき(夕節のこと)
きへさんでいさうらよても世(不足)をひ(但)
わうさし
めりさまへ(主)いはしあんしうめ
しと世わうしとておさおうしつい(不白く)
まうめもと太歳いわありうしうけれは
のじやうよておりしゆますうしみさう
地らじとこさしえりろいおしへの制は
(作り)まとむま(正月七日此事之次)(内裏)
もろくて白るひくさ(せち)(念)節会の日
のぶしこ紙う(孟)(蔵)一
のぶしこ紙う出して昔のこめしうろ
しとしへくいつうしこさ内分様あうこさそ
らうさの(ハッカアニリ)十余日、朱雀院より
花ぶらいかうこちうさ経るれ、(キ)(ニ)源氏へ

うつしうつるや昔のことをしのびまつるもことさらなるハ忠仁公の例にも相かなへるべく

こまやかに見ゆるの先ハツ余田エリ朱雀院よ　細 仙洞への行幸ハ毎年朝覲の行幸とて毎年必ず女子の

御時のことなどいひて見なれてまし御ありさまをおぼしめしやりて但椿亭にて春にあまたたびその御事に

ふれしてみえ此の御ありさまにて冷泉院ハ朱雀院の御行事にうつりしと也

さしてまた仙洞への行幸のうち中古よりは連々のことかはとや　花 旅ノ文ニ云ク時行幸上皇

宮ニ例 天長十一年正月二日仁明天皇幸ス淳和院ニ見国史ニ天慶十年正月四日村上天皇幸ス朱

雀院ニ但母后御同宿謁ス太后ニ拍殿 見李部王記ニ

あをいろ 細 麹キク塵チン之河晴儀ニ

諸臣着麹塵袍ヲ一日當色

也 花青色の袍の下襲ハ

桜かさね式ハ桜ノ表袴など見タリ 裏ハ

さくらにハ桜下襲也

普通ハ裏ハ桜也

あかいろハあかいろの御袍

河西宮記云内宴之日臣下皆麹塵主上服ス御赤

色ヲ而或ハ上御服同色之

袍ヲ是又例也 花雑例之中ニ

故貞信公并ニ小野宮大

臣殿など着赤色ヲ云々

我赤色ハおもねりて渡り

細 落葉之
こゝかしこの 三光院殿点キ ハツ 忌月 なりとひとしき様の文 細 声よ後へし またこゝさとにあてゝぞ

をいとはやしろかれいはやみもれゆくいひと 朱雀院

まつるひまぞなきひとつもじ幸まつるも御

そまゝ上達部みなこゝちよくめでたくつかうまつる

ひとりまつりどもあれからおめでたくかざり

冷泉院之
ねをさゝまふをりしたるあかいろの御衣ぞなまめかし

源氏之
めしあかりて出まかる　ふなかめつらし

あかいろにまといかれないかあへしかりの上

の御そしくへのうちのゆきのこと

ひかしかまへ 細 かつのそれの日ハ臣一の忍ハ赤をきるとかやといふもの文師兄云

源ハ吟の似たるを用ひ御装束すれハいかくひとつ一色にかゝる

かくやきて見えわかぬを絵人ぞのさう

ぎくやうにいつるやりことやう流もいと 細 朱雀院之

きよらかなるわびしさを見てげに西よ

うつり海めきたりけるにすゝしきをまなり

名さいわざとの文人もめさずしてそのざ 文人

えりこうしとゆかしかるまで学生十人をめす

武部のつかさのかたの試を探らべく

れ都の大臣の家のかくとをゆかしく

あやかりかくじよくさ物気ハ調ゆるわかくたび川

あさかね舟よのりて池よさしいでゝいとゞ

わざとの文人 細 さしてた

文作文とハ云きし

かくせい 細 学生とハ今日

文章生す人と云

一説に文人ハ儒者なり文学

生ハ今日文章生なるを

いくさの人ハまり

式部のつかさの試を

うけずして試験よ

花 陽省の試に勅題をいだし

細 勅題をおさへし

ハ延長應和康保等の例

く源海よ奏 師式部の

つかさとは式部省の事也

元入学の試の中に選ぶ

と稽士是を挙られいたずら事を察して善識ハ史記をもつ偁めて及第の後之觚文章ニ補
をぶとて或郭宥もて課試とかうらしせ試ハ詩若賦とつくらしむ及第人と文章て
の生に補きて是進士ともいへり或ハ諸第もて勅題を下されて試らるゝ事し文章
の者ハ初奉の次ヨり或郭宥に当すくしく諸第の試ハ詩を作らく及第ノ後ハ進士
よぬくやかて作たり任しハ西より 何今東聴病甚者殺ニ慢ゆるとも忘るべきと
めくしうきき 細 聴病どうつく 見花言
こゝとりみてより 孟日 細 殺島の作文とて中将の人とりよりあがりて
つるかね身に 河放驚試るべし
称せ作らしすろく是殺ハ自然に徒会るをさせじの国なり唐朝にも進士と成
身をなに人をうよりぬ所もぞそぬく文とうくせ作らし ろかの知絡よ云
もゑやさ試の訳を好りてひらぬよのせられてかうらまれつら西白協こ
作り進士になるさまで方略の宣旨くだりぬ

うくろうしき
ぐうしても倭びめへ 細 楽あど
きめどとゆかきく

もぐるばせ日やうりくてぶの舟どこと
こぎすひく網みだそくすり釣の山風の
紀ぞる垢とおろくふさあれをうろまくると
ざの尾いうつうしきららるすてとまし
らひおそびわぐるく抱としく世中うしめし
うゆかし後うり。去鶯鵜まの風じよ若けむ

後のみしみざかりのくり
細 説るに隠の任いと桐
壺とし多くなるし偃まなる案前
陰ふくあるべし若紀
の宮の時を用がしおもう
し 花紅のえ人よ源氏の
表鶯鵜群殺しとゆか
しいぞうし
鶯よの 細 今日の表鶯鵜
いかゝかされ先むろまつ我
とい桐壺の御門のうらり
おふさきそうり我国
九重を 細 洞中をたしとう
らくこゝろぐ今日の御華に
て表と拓て表る〳〵
うめへと
細 唐鶯ようりの礼楽を
つくろうと伝中を経
しの世用よりつと
楽ふとしいひ示こいある
いふめくと礼といふし礼記
まいろう孟日 師 礼記云
楽由中出ツ和其 礼自
外作 故在貝ニ

のえ人の紐なし出て、後のこうじみなばら
さのくしとてへやとの名つまるまつけて。
源くゝよ桐壺の御子なるし
さの世のこし鉄よ出がしつゞけるかまひ
からり経よ出むし。後う涙うそしけまり
 注 鳶一条院に申させ給ふ
ふ宿ふ
 浄寿
鶯のさえつる表いむりしめてむつまりし
 朱花ゆまう
九重を霞へぶつる豆とそこうよもきとつげ
 朱荷綴し
経のうけぞうそわれかれ浪の人
 十細 鶯翁初口の文し
らうくひとの紋帥のこやとこうえし。
今ハ鶯紋つまて。今の上よ涙みくしめふ
 発白露し
 茶方
またくめふ
いめへとかつきつへるる論作るよきえつう

笙の　細 笙ハ衛府ノ役也 故代々
のあくらき音に及ばぬ
ならしと卑下しあそく
兄親王のあせさるハ皇
が代々の好きたるをさへ
あそぶべく
これハ彼ころく　細 笙のこと
也なり孟津ハ流下也と
前との御事なれども
あかうさふもなかれども
是其席にあかうさまへて
あそしにこれさうざう
あかうき御心地御者硯へ
楽所よりてはかつつなられ
ど　河 李部王記天暦
二十九 楽所ノ願遠絃
音不分明右大臣奏之ニ
皇今右図書寮御琴ヲ
云云 畧記之

笙の笛ハ人々しうわざ　細 親王わたらせ給ふさかひ
しり給へる、めでたうよきめでたくしたてさせ　冷泉なりける
とあり
給ふ

笙の音どもしつくさえてつるハまつらせ給へ
女の君やわらかにかの給ふをすりわかうさ
笛こそすくゆかしくとかうまうまつられて
ほそらてさ笛よこをくのことなすれどなか
まこはとなずれずや如よろへみつきならし
てかうやわらへ和琴とそくて北院 つ
なかれバ若きへよほこしづとめす。蛍兵部卿
君ひきての琴の和琴、さうのれくし 朱雀院
のは常よ系そしまん八例の掻かきかしく 琴 筝 内房く 琴也 度よろつゆへし 蛍兵部卿 蛍兵部卿 冷泉院

かへるくく　河 安名尊
人　催馬楽　呂

よ笛ありまふさらいらじきよりほのぼのれ
よりほまつひとの例としまくるハ
さくかくるさまさうかの廊よ人あなめく
うつる梅のれそうしくあそびくつぎり
さうるくハ月かかりるよさしおてかうしと
どよ笛のありさまにこうしてなど
つまかへ花とりして北わるあそびたやる
ね、和琴も、ぬれどもしかつかでよい人さきに
のみおろしまうとさるこせとてしとかくひ
きらしきとしあはふんもすさけな
されバ人々よはらうしせなふ掻くつるとよ
ろともよさふかくひ絃、君給しからび給
河 唱歌殿上人 中務く 夕霧も 河 夕霧之 和琴も 細 夕霧之 細 蛍兵部卿 冷泉院之 冷泉院之 夕霧之

おもてをさへさらしはてんを
てうらみもあつまりぬへき
細 上人の此人かくしてんや
うき事なりても
かくさるへきをひかうる
うち捨しうきよを落雲
の此ころをおしく思ふ
なるへし

て、にはあるまじかりしなとしいふもつましき〔孟 大君の此年よりかくいはしとて〕
ひとりとはれ人ひとしき扇をよもとおもき
こともてつくるものかりしよみすくされ
もおほしけるものとも、しおもふもおほす
そいまはらく、みうぬるもてひとよころけの〔細 后の御こと〕
こともまれ何よけれど、いとゝをしけなく〔御年の事 その事〕
まうちおほしまいてきるもなるんさふらひ君
の御世のことおほしめしくれ給ふこともら
るゝき給ふさへきれうけ、ともよをおくれ給〔主上御ぶく〕
く法、志のけちめをもふすへきれぬを
ありあんするくさめ給ふ御かゝさへしもれ〔みな御年なれと〕
〔源氏の御心のうちをおしはかりて〕
此の〔しのふなしもしもやうへきさまふまをて〕

さうくしるさしの御けしきなと
細 相蓋帝摂政太政大臣
すしかり孟落雲など
のことなし
おもしもさうつき扱よ
細 此人ハつあくなり
このしそこはりもしまい
さるへきのありけり

后ハ我ものよしらほゝつきい
ゝよ御かくらん
師 源の威勢あるよつま
てし
世をしすらあへきほとをせ
孟 弘徽殿の心源を忌
まかくみそれともふく
にまくをハ弟されぬ物
とらひまつし
いみへとらひ物わもを
師 若の此をらひまつ之趣
幸ハ必嫁悔あるまし可思
呼之

しくうくよきのくるしゃのかくるをも
〔早くよくりましてし〕
のとやらすしてくらとおちいひうさらも
〔鬼后の〕
后の御むすめの〔弘徽のの御こと〕ことにさえ〕
〔源のるし〕世よりあへきをまくなは
のよことしふしハあくらひ物かいる何給の
〔朧月夜し〕んのことゝへのとやうよ物わしあかる衣ゐ
〔細 是より前東宮の男皇子 師 源氏に勝し〕うしてかかくら念ともるへきなりて風の
つくふ后ほのめさ給ふとしなへし
后ハ物ほやけよそうをそそ世給ふとあり
〔細 年宿舞薨也 師 前坊は経〕時すけれてうつりのつらうあるの
よろしのくとこよふれて、此人ようなるね〔鬼后の心のうち〕
時そ、命あるかへてよろ世の楽をすへるとと

とりえこぞかりしう
御よろ川のへよかへし大
臣の御心よるるゝゆるあ
延喜のこの朱雀院の代
まうりえしすきとし
が書るる雲林院書陣
あらくわしくまをす
とこりつさまかりう
没後なるし
進士まだり給ぬ
細 擬文生入しうきとされ
文章生とぞりわたの代
の儒者の家けんなりしが
秀才よりへつそうし儒家
けうあるらんい秀才が
夕霧は文章 貢進士
ハ擬文 より士ならして
夕霧も擬入し給ハ進士
になりし進士のちハ礼部
の王制より出て進士を
て爵禄ところにさをを
りかし爵禄 秀才なるか
ハ何もさとしるく喚ぬ

とやりくさ海わえらし、きろうゞ川殿わたりし 於席横
うけり。花すて池わたりまさくし、御まうれさ 是在 細 花ひかう あひきう
もてまうりて、おんもらぐくるしくさへ 先帝院ゝ 御人の積経をれぐちよさんし
ぐらへぞあひさくしあひやうくてたぞその 夕霧も
系ぞの日のふそら川くらうつうとまて進 作文 何かかる詩し
書よ奉りのひぬらしつもれうりしこの
擬もどえらしを給しりたゞらくしじの人 人がり
まづうよ三人あんありけり。秋のつかさめ 細 夕霧も 及第 天安の元年三二月
まゐりあらえそ、給にはあかぬの人の 細 雲の一
我もいうそうし世ゝをけまでし、地とくのとらに 細 内大臣也
よめりうこえし給をつゝうれバ
まかすくてあぢもこいめんし海そうど

つねより
秋のつきあしに
ろ原ヰ川りゐりつ水を海
りくを 画 六条院造営
のすられよりみそうさり
御落雲書よわくま
しおり
六条院のこうりよあ
心めけ 細 六条院の四條之
花 六条院 京極の住むひ
しめにまなるきか六条院
四面八町のおはつくり
へられらるし 師 中宮六
秋好との弘徽殿の古里でなど
とのうへ作られてし赴
つまのみやらりとらへ
四町ハ辰巳町・未申町・丑寅
町・戌亥町之 河原の院にも
源融公の絶倖園むろの跡よ
神南備の種松と云者
其人の住のこゝろりよ四面
八町のことかゝのをつく
まつらわてこらし 私何
しらり 略記之

画 進士よみれバ少昇(セウジン)進もかくし、仍て夕霧任侍従也 代河海具之
れきうそこゞらりきれ、めでいさくとりまあ
えまてうさこうよわうつしさみ中なりあ 夕霧も雲あもし
原ヰ川りゐりつ水を海あれと、地あぞくハひ
ろくえ風あわりくくらうしこみらく地わう 従五位上加冠元服し
うゐさ山里ばへ當とゞことをつゞくすまゐん 内大臣
のいなみくへ六条京極(きやうごく)わらりよ中宮の
みまさ立えの御ほうわ四町ちをこめて 細 源氏之の父家之 御旅年之
川らしを給いおわあんあま年そこ年 いそこう
よおりあひれらどれかたのくと。こいあん
うへ地わまううちよ地よくことげよるう 源氏 六 源氏に秋好の事之 加えのいそこさ
ぐうきことえありと覚しとくやう

内裏のこと　宇賀　真の上月をこしらへば世にならふよ御法ありて　実は八四寝我

めでたくはめづらしき人
せし六条院つくりおきて
いなかどもまゐりきとく
内らしこゝの事
御内裏のうちに年満
君をと賀するの心　細沙
賀也年満也三代実録
貞観元年十二年九月
廿八日丁巳太上天皇延暦
願よめる僧五十人於清
和殿二大般若経講法
華経一限三日説太皇大
后今年始満五十之算
由是賀修吾新禱
錦齡親王公卿文武百
官畢也会
經法華の日　五一條　賀縁
慈観賀也法するに八葉
經寿命経等依長の追
こしとせの中よは
御内裏のいりめしきのさきを
こしまそれ武門よ世わり

の法は世さきもなかりしかば、たまたましらん
法家の道おこしていそぎ給ひしかぞ
いましてこの法はいとゞ法らしるのこそ（六条院遺作のこと）
しげく人華人のさかえめるどきたのしき入（源の法のことは）
ていとるこそまふ聴法法華の日持ぞうるさく
ろくたなびく我らんいつまでも世始たちかん（細衣穀）（里家上の御中）
しの法みもまけくまのふしてにもあり
はなかしひましていとこそやひかるこそ（賀そ云ふ）
うそしてあんありしかひかる世中ひとさゆ
もれかはいそぎこそ事ちゞ武門はのこやみもさ（武家の政事のこと）
うみしてしば世中よはおほひもさはれんやれ（源八世人ハた怨のふ乃あまねきふしし）

こゝよみれて　細　源氏
武門大とかよろしぬれ
中みつきしかひとゝのたぐ
ひあるき竈よひかまく任
よろこくさせしの御んさ
尭日黒楼師役八色にこゝえ
つくしこし色ゝ
師武門八源平の時にむかし
よそぶりしを源氏將
猶まりぞれを武門の色
ひあらすまて
我家まそれをかひこて々と
武門の家の経よりくし
まかるかはる事なれどもとへ

ど、はもらりそばかやみくよろつきけるすくど
とよみれてたらしまみめたん人ともれかくら（武門のことのみさと常にあ）
いきくじれそらしきのこそやなまり　武門
らしとこひ事なまふとひまもたえあり
めでいとおしくもりしくてと始けり
せうくあやらさりしづくひまつる人で始（源の色ひ人多きみとく）
これ中よとりわきさうれ色ひもくれて（業を源切よ長寿へ六始しこと）
世ようつふるてめでさきつとよ色ひ
しづかれさまつる内裏くさなそ我家ま（家の商世こし）
てへまかひとぬどめのほくろり始めま
まうくこの世よわきりまでひくりいて（家の守ること）
すらね八業ぬまさひの黒のきなりよ

六条院つくりはてゝ 作六条院と始て出たり 河内方六条院は河原院を擬せらるゝ説にも見えて よりて一世源氏作られ これも其例か 延喜十七年三月十六日記 此日参入六条院ニ 此院は左大臣源融公宅也 子大納言源昇 進於宇多院ニ

ともあるべきかなとよろこび給ふを北の方は（紫継母也）心ゆかずものしとのみおぼしたり。女御の御まじらひのほどなどにも、おとゞの御よういなきやうなるを、いよ〳〵うらめしとおもひしみ給へるなるべし。八月にぞ（源氏卅五の八月に）六条の院つくりはてゝわたり給ふ。ひつじさるのまちは（秋好）中宮の御ふる宮なれば、やがておはしますべし。たつみは（紫上）殿のおはすべきまち也。うしとらは（花散里）東の院にすみ給ふ對の御かた、いぬゐのまちは（明石）あかしの御方とおぼしをきてさせ給へり。もとありける池山をも、びんなき所なるをばくづしかへて、水のおもむき、山の

秋はよ御かたの それ〳〵の好ませ給ふ方にまかせ給ひて四季を分ち給へり 抄 紫上の町也 南のひんがしは 仍て春の気を作し出て よめる春の御方といふ 師説 紫の上のこゝろにも叶ひ給へり 君の春を好み給ふに心をよせて まづ春をもてはやしけるなるべし あれとかはり 秋のせんざいをばむら〳〵まぜたり 春ところまぜてもなほ秋を好みたまふ けり 中宮の御まち 師説 坤の町にて前斎宮の旧宅の秋にてあらせ給ふ しも喪にこもり めて秋の気をつくり にかぶれば秋好中宮とも云也

をきてをあらためて、さま〴〵に御かた〴〵の御ねがひの心ばへをつくらせ給へり。南のひんがしは山たかく、春の花の木かずをつくしてうへ、池のさまおもしろくすぐれて、おまへちかき前栽（せんざい）、五葉（ごえう）、紅梅（かうばい）、さくら、藤、やまぶき、岩つゝじなどやうの春のもてあそびを、わざとはうへで、秋の前栽をばむら〳〵ほのかにまぜたり。中宮の御町をば、もとの山に（旧宮の御所の山也）紅葉の色こかるべきうへ木どもをそへて、いづみの水とほくすまし、やり水のをとまさるべきいはほたてくはへ、滝おとして、秋の野をはるかにつくりたる

きうの大井の　こゝより
めんとて秋の初りしる
さ名所をいへり　むかし良しそ
ふのひんりし
花数里位の北方家乃
北方といへり

むかし如何なる　さうより西
川花とちられのくし
くぶりに　孟　苦膠　古今
物名苦册　牡丹と云
従あり只各別　なと
ひんがしかりて八ふてむま
ぶの初りし
が良の所の東西八雲帰
めづらし何　一場戯
埒

里ふそのころよりひさく。蟹よまれこそ
出ゆり。きうの初わるの手ふらの雅山。むかしと
くまけをきられしより様あり。ふのひんがしは
むかしけるを　跡おりて、夜のうけよよ
出りれはやへちうき荒栽られ行たる風
そしらうべくふあふうき舞のやうなわり
来ども、来おなく初りしる山里めきて。
卯花がきのこと行るよしありうく。
むかし初かり花とらむまでしと
くしびらまよあびやうの花れのくさぐ
ときへて春秋の木草その中よう海
どうり、東初りてハふてむまぐのかもぐ

みのまちハ　乾の町比西
北すて八町ろの後方　家を
のほとりとそし

きれハがわるうそそうう
細　母よ後あり西向し
孟　えくそハ頗君あれど
いかし
ひがんの比わひハ　河　彼岸
斉法成道經云一切衆生
生依将二八月斉十方
世界一功衆離苦得楽ヲ
霊端而已　細　時正される八
まさ目よいう　ありて六条ノ
院への比うつりの事をし
一ときひうとおれうるの一

行くつきぐらゆかひて、め月の比あそび所まて。
分の煙らりよ萬藩ろへしげゝとそてむ
うひのよこゆやして、世よるるさじめどもを
とくの人しるそさ世まゆへいま。かしの中うち
く。ふゆりそてつきまるてこらうかんなう。
へぶそのうきよ松の末しげく霧とをそ
めそゞへてうりよ世てうり。花の色じ
め鋼のむかしとぐへき蘭のかざき。それを
ぶかるさそそくしぬさくるのをきっぬ
左山ま犬のま深きみじとどうろへくう。
ひがんのころかひとちり給。一度おとさる
めを世給しりじさうほかしきやうおりとそ。

夜よ梅尾わかんとあの
けふとさかしらきこそ
中条ハ法御要引て

今一りき　細　花翁里之栄
よ花ある里そこの秋そ
ひとへうらわひまふまの
竹後の荒　細　夕常之花
わかさるよ竹すし路
なし

中条ハもてらしのへさせ路御の方とひしうれ
氣色もむまめ花数里そ又秋をひてう
別ろひ路善の竹ゑろしうひハ此比よあそ
ねどいてあくとおうら竹卑十文竹常四位　細六位
ろ隠らうそ文位敬上人ゑしいさるへき根
をえらしをまつり。こしはりさき行よいある
まで世のそしりとやとおつさまされえ。
あまことをもいかろくしうのめしここ
といわし。今一方の竹氣色をかまくれ
もし路つゞく竹後の荒をひて。それこハ
りそりしつきまへばけようをあるべき
しら也ありとミえしより。女房の當関

ありくのうまけ
細とわけ也　孟　完く
細分何日　師　めりしと
いかりわそこまやうま
うせきひろとく
よはつと　孟　背晦わ
まし。もとろくしきく
師世のきしつきとかり
くゆきろくしうろね
おとハえといしあせ
となり

まらでおそくのらまけぞ。六方のへしとより
をめてしうりける。六六日るそく。中条まうえ　細点　松路還おとして六条
浪よ梅まかくし
させ路比竹きうしころ。さはつとにて亦
をしれ。竹さいるいのもくれまうりろとば。
まる地よそ竹ある路のむかしあらうを
つまるまかりしゆきをば世よゆりくかとハれ
まへるしもくれてあんおりしまうける。
このまちらくの中のへでそみは。へいど　扉
もらうあもど。さうくゆきうよりしろく　扉
けらうくかりしきあるひよ古あしなつり。
九月よあれハ。紅葉むらくるを付て。家
のおもかへえもつきれ面白し。風薪時る

わらハれにたいめんさの
初か物からして
弄一説 わらハて去年ハ
わらハ八絹ようらしびの
おも物しはかんさハ
さすのくもりうもんをも
ざいさんへいのうきする地也
うちりしきじもしうきれど
師 紫宝のうち海なかを
おりきれバれともとつるハ
きうつぎされうれども
ましいの地うしぎやなう
孟 秋ぬのちしえと数
あそびつひゆへざうくい
わさ花 紫花物語えい
みそへのさに流つつらうえ
つうせ語いぶりうれと
名の世いれこのとまで
ら曲く流つことせかかう
ことかりとこせ花そ
その譬えもずとれ
細 以上桑門の院の流る
花冬の院上東門院の流す

花夕霧よれきこのふさはゝてこの花紅葉に
そこなきまてしてもみのこよみまし世あそうり。
細 紫上の流る之 孟 弄 次のよらく 河内家鈔
ゆかしさやうるやかくしてのこぼこあらわし
弄 紫 上の花紅葉の春よりさうし
みなんのおもう物かきるでおかくらぐのをす
文面蘇芳重襲月之
りのくうざもいうといつそうそれてらつりも
なおりの色 本イ
さ霜のそうらしと添てまかうりしさ流
しきすれどわしえの此りしきくとるん之
此ぶり持さりまれかさら所よふつしひみすれ
まそ
されバりてあしあをき海あさはすをこの
かり
ありうかりしはきうとこのは
秋好 紫のうとのうちさ
紫 花の
むつしまさ川そのえわがやどの紅葉をと
風のうくがふんさよにけりさんつゞいはいつひを

まつしひるれされハ 中宮のやどしろさは流うきよつつへすれうれバとさく
ふかしう 細 ふかしるきと心よちめきふえ紅葉の面白きこともう待人世うらさく 春花同
てさやまさきまうのどとをおりしはそうりハ此流みこ
のかきよこけ 昔志さ思ふなく去て紀物之
しさいさ月ふしぎのんかへ
孟 遊 松なり
して紅葉のえさゞさよ
紫方 風よ数紅葉ハうろしさの色を思ね
孟 久しきよさんとなし
のまよりけてこそそあ此思ての松もこ海
うよされバえすしね つくちまでしうしもあすり
遊とつらうし
弄 此盡の作物の事 くみあつろ 細之
そうらくとうあへそやつりあへ為ゆんつく
松ぬの感のみ之
ちききなしと世おりしくれうんをは蒋瀬んつで
源 紫へ の 細之 細 中宮の流 おこし
をめでておくう印くび紅葉の流るうきこい
細 岩胡蝶是の序よりさ初もも也
妹さきかきうつとし
とおさげのありの色の花ぞさうり よ此流のさん
紫之
今宮中面白物きれつこ
さやのしまへ此は紅葉をといひわさきさんぺうろ

風まうり 細 紅葉ハ八花
うりハうろつさとハとをきの
松の色れどりれつきま
されどとふかつきしね海
をやうよのてさつ之花か
も早下せむしての海
みうし 師 河海よ 拾遺
集の素秋の同音のす
とのうらう 略之

もろき船 中宮と龍田姫よ
そのひあづらへうり 孟 秋同

兼のうけは立かくれなきそ
師兼のうけどなるまゝ
しそしいふらかすり
まことなは此御方かれ
ことふの是まそみえ
まうさし
いくびのふやうなる
細殿とのゝ四町八
町の中みそくなゝ
しまへるより御覧すゝ
るべし
ひめぎみの
孟明公の姫君の御あ
と御行しあそそし

孟退てし

さ姫のよそんしもまさどかうしたぞらそし兼の
源は立かくれてこそつゝきてしハかくあらし
哀しまゝいとわりやりまつきさぬ御行の
兼御目かるよいくしとやう姫御とゞまる
まそ哀しなよりし源氏の御方いげうなぐ
乃御かけ名ひきとまりてかゞるるゝ人な
い削と為くまぎしかへんと是てし御世見
よあん源氏のか御方明しひごしめ御行
どとろすもそまるしより源氏姫君の御さ
めさ如何をはえりこの御様かをけらず見て
よありしずのと物しえくりそ何とせさ

まへつこ